

# 明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考

中 山 光 勝

一 はしがき

明治四（一八七二）年八月十五日から同二十日にかけて旧松山県下の浮穴、久米両郡において旧藩庁の宗教政策および廃藩置県に伴う旧藩知事に対する政府の婦京命令などに抵抗する農民が蜂起したことは周知のところである。世にいわゆる「久万山・久米騒動」なる農民騒擾がこれである。

この騒擾については、これを紹介したり、関係資料を復刻、収録した文献もこれまでに多数公刊されていること<sup>1</sup>もあつて、その概要などは、今日一応は明らかになっているといつてよからう。しかし、こと、その司法的処理に関するかぎり、後述のごとく、山之内才十、田中藤作および相原喜助の三名に対する処刑内容については、上掲文献中の処刑記事に異同はないが、越智源蔵、越智喜代助、藤原安右衛門および西原藤次の四名については、上掲文献中の処刑記事の内容に異同がみられるなど、未だ闡明ならざる部分が多い。これは、思うにこれまでの研究が、騒擾関係者に対する司法処分を最終的に決定した司法省の資料を利用していなかったことによるものであらう。そこで、本稿においては、これまでの研究に利用された資料のほかに、法務図書館蔵『諸県口書』明治五年・二十六・賊盜・第四百

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考（中山）

五十一号に収録されている「石鉄県伺浮穴郡久万山日ノ浦村農山之内才十外六名前知事久松從五位ノ東婦ヲ阻ム爲メ多衆ヲ集メシノ件」<sup>3)</sup>などを利用し、該騷擾の司法的処理に關し、一、二の新たな事実を指摘してみようと思ふ。

(一) 年表類をのぞきこの騷擾にふれてゐるものに、菅菊太郎『愛媛県農業史』中巻（愛媛県農會・昭和十八年）二四二—二四四頁、小野村史編纂実行委員會編『愛媛県小野村史』全（小野村・昭和三十五年）一七二—一七三頁、川内町編『川内町誌』（川内町・昭和三十六年）三八六—三八七頁、松山市誌編纂委員會編『松山市誌』（松山市・昭和三十七年）一三四—一三七頁、高市光男『久万山・久米騷擾の展開』（愛媛近代史研究 第六号（近代史文庫・昭和三十九年）二二—三八頁、佐七川村誌編纂委員會編『佐七川村史』（佐七川村資産處理委員會・昭和三十九年）二二—二四頁、景浦 勉『明治四年の久万山および久米地域の農民騷擾について』（伊予史談 第一七九号（伊予史談會・昭和四十年）二二—二七頁、久米村誌刊行會編『久米村誌』（久米村誌刊行會・昭和四十年）九〇—九八頁、木原良一『新版伊予明治史』上巻（愛媛県文化財保護會・昭和四十二年）一〇—一二八頁、久万町誌編纂委員會編『久万町誌』（久万町・昭和四十三年）九八—一〇三頁、景浦 勉『伊予農民騷擾史話』愛媛文化双書10（愛媛文化双書刊行會・昭和四十七年）二二—二九頁、田中歳雄『愛媛県の歴史』県史シリーズ38（山川出版社・昭和四十八年）一八五—一八九頁、上浦町誌編纂委員會編『愛媛県上浦町誌』（上浦町・昭和四十八年）一一六頁、愛媛県警察史編纂委員會編『愛媛県警察史』第一卷（愛媛県警察本部・昭和四十八年）二四四—二四九頁、重信町誌編纂委員會編『重信町誌』（重信町・昭和五十年）一六七—一六九頁、三宅千代二編著『愛媛県各藩沿革史略』（愛媛出版協會・昭和五十一年）一二〇—一二三頁、砥部町誌編纂委員會編『砥部町誌』（砥部町・昭和五十三年）三八二頁、田中歳雄監修『郷土史辭典愛媛版』（昌平社・昭和五十四年）一七一—一七三頁、面河村誌編纂委員會編『面河村誌』（面河村・昭和五十五年）一一二—一四頁、景浦 勉『愛媛県浮穴郡久万山及久米郡一揆』国史大辭典編纂委員會編『面河村・昭和五十五年』三〇—三三頁、松山市史編纂委員會編『松山の歴史』（松山市・平成元年）一三八—一三九頁などがあり、また、土屋喬雄・小野道雄編『明治初年農民騷擾録』（勁草書房・昭和二十八年再版）四九二—四九三頁、近代史文庫編『明治初期農民運動史料』第一輯——松山藩・大洲藩・新谷藩——愛媛近代史料No.1（近代史文庫・昭和三十五年）四一—五七頁、小野武夫編『維新農民蜂起譚』（刀江書院・昭和四十年復刻）五五—五五三頁、久万町誌編纂委員會編『久万町誌資料集』（久万町・昭和四十四年）四三—一四七頁、小野武夫

編「日本農民史料聚粹」第四卷（酒井書店・昭和四十五年復刻）五二〇—五二三頁、前掲「愛媛県各藩沿革史略」二二頁、愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史」資料編・幕末維新（愛媛県・昭和六十二年）一七六—一七八頁などには、旧内閣文庫所蔵の「愛媛県史料」や愛媛県庁蔵の「愛媛県史料」や愛媛県庁所蔵文書などより関係資料が復刻、収録されている。なお、愛媛県立図書館の所蔵にかかる「伊予百姓一揆」一巻にも「久米騒動」なる項目があり、この騒擾の概要が記されているが、伊予史談会の所蔵にかかる「松城要輯」の中にも「久米騒動」の項目があり、同じくこの騒擾の概要が記されているが、内容的には、後述する「愛媛県史料」四十一・国史第一稿・松山藩紀に収録され、上記の先業にも復刻、引用されている「久万山頑民騒擾」と大差ないものである。

(2) 例えば、この騒擾に関する研究の中でも比較的詳細なものであらうと思われる高市・前掲「久万山・久米騒動の展開」二九—三〇頁には、

一揆の頭取……として処刑された者は久米山では（山之内—中山註）才十のみであった。しかも四年十二月「兇徒ノ首トナリ浮穴郡久万山ノ農民ヲ煽動シ、多衆ヲ集メ、及出村候段不届ニ付、絞罪」を松山県から上申したのに対し、「御不審之ケ条有之御差戻相違」……とあり、のち「凡多衆ヲ集メ訟ヲ構へ、官ニ抗スト雖モ、良民ヲ擾害スルニ至ラザル者、流三等ノ例ニ依リ首タルヲ以テ准流十年」……という判決が下っている

……これに対して放火を働いた罪により相原喜助……田中藤作……の二人は絞罪……の判決があった……越智源蔵……越智喜代助……藤原安左門……西原藤次……については処刑されなかった。

とあり、また、景浦・前掲「明治四年の久万山および久米地域の農民騒動について」二七頁には、

この当時は裁判所がなかったため、判決は県の聴訟課でなされ……被告のうち最後まで残されたものは、四、五〇人に及んだようである。最も重かったのは……田中藤作で、租税課出張所へ放火した罪状によつて絞首刑となった。

とあり（景浦氏の他の編著書、例えば前掲「久米村誌」九六頁、前掲「伊予農民騒動史話」二二四—二二五頁も同一内容である）、さらに、木原良一・前掲「新版伊予明治史」上巻・一〇九頁には、

山之内才十に対する「絞罪」処分の伺いは、罪一等を減じて「流十年」の温情ある判決があったのに対し、附和雷同組の田中（藤作—中山註）、相原（喜助—中山註）両人は、伺いそのまゝ、「絞罪」の極刑が課せられ……越智源蔵……は、流三年……越智喜代助……藤原安左衛門……および……西原藤次……はそれ／＼徒三年の処刑があった。とある。

(3) 「石鉄県伺浮穴郡久万山日ノ浦村農山之内才十外六名前 知事久松從五位ノ東帰ヲ阻ム為メ多衆ヲ集メシノ件」法務省法務圖書館蔵『諸県口書』明治五年・二十六・賊盜・第四百五十一号。この文書の内容は、騷擾発生当時、浮穴郡および久米郡を管轄していた松山県が、石鉄県に改名された明治五年二月九日附（この当時、浮穴、久米の二郡は、宇和島県に移管されていたが、後述のごとく、事務処理は依然として松山県によっておこなわれていたようである）で司法省に提出した山之内才十以下七名の「御仕置伺書」、なお、この伺書には、山之内以下七名の騷擾関係者が松山県に提出した「口書」すなわち自白調書が添附されている。さらに、明治五年五月十五日以後、浮穴、久米の二郡を管轄した石鉄県が、明治五年五月十五日附で司法省に提出した「旧松山県所置擬断伺御不審之廉御訊問ニ付再調御届書」、なお、この御届書には、栄蔵（姓は不詳）の「口書」が添附されている。さらに、これらの伺に対する明治五年十月十八日附の司法省指令である。ちなみに、この資料の存在に最初に気づかれ、注目されたのは、今は亡き恩師手塚 豊先生であった。本稿も、また、拙稿「明治四年・伊賀農民騷擾裁判関係資料」（二）・本誌第一号（平成八年）一四四頁に記したような事情から、先生の御遺志を引き継ぐべく浅学菲才をかえりみず草したものであり、謹んで先生の御尊霊にささげるものである。

(4) 本稿における資料の引用に際しては、漢字は現代一般に使用されているものに改め、合字、変体仮名についても普通のものに改め、また、ルビはこれをはぶいた。

## 二 騷擾の概要とその裁判

松山県浮穴郡下久万山周辺の各村民は、かねて旧松山藩管轄下の各郡において実施されていた「神仏ノ混淆ヲ正淫祠ヲ除クノ令」を「大ニ厭忌シ」、これが実行に着手しなかった。そこで藩庁においても、これが実現を期すべく「村吏ニ命シ該山ノ堂宇ニテヲ焚毀セシ」めたため、これに不満を懷いた各村民は、「不良ノ心ヲ生」ずるに至り、さらに、この時期、明治四年七月十四日に実施された廃藩置県に伴う「知事免官帰京ノ公令アルニ際シ仍テ知事再任ノ

歎願ヲ名トシ同郡七鳥村外二三村ヲ煽動シ各鳥銃竹槍ヲ携へ同四年八月十五日夜久万町村ニ屯集」し、諸村もこれに呼応して「陸統蜂起ス」るに至つた。松山県浮穴・久米二郡農民騒擾の勃発である。

農民の聚集に驚愕した松山県は、「速ニ吏員ヲ遣シ百方之ヲ諭ス」べく努力したが、農民は、この説諭を「聴カス却テ村吏ニ抗シ揭示場ヲ毀チ或ハ出張官吏ノ到ルヲ拒ム」など「其暴威益甚シ」き状況にたち至つた。そこで、松山県は、八月十七日、

此方只今之身分何事にもあつかる筈無之候へとも、昨今一山之者とも多人数相集願筋之儀有之趣、願之件々何事かは不存候へとも、仄ニ承候へ者不肖之此方を存呉、全く旧情思候ての願すしも有之やに相聞候、此度朝廷御一新之儀ハ皇国之御政道一すしニ出、万民益安堵いたし候様との厚き御主意を以諸藩一様に被廢候事ニて、此方ニおゐても深難有奉存候儀ニ而其方とも難有相畏り可申立処、明惑彼是願立候は筋立さる次第奉恐入候事ニ有之候、譬別ニ筋立候願之品有之候連も、兼而御沙汰ニ相成候通徒党かましき儀は何程可然ケ条ニ而も御とり上相成す、却而徒らに騒たち、上を憚らざる連ひニ相聞、以之外の事ニ相成、人々何れも早々引私安座之上委細之存意穩便ニ申達候やういたしたく事に候、左もなくては此方并銘々中ニおゐても奉対朝廷不相濟儀、左之時は此方を存呉候儀者反而当家之ふためと相成、俱ニ迷惑およひ候やも計かたく、甚以心痛およひ候、此段篤と申合深く考くれ候やういたしたく兎ニ角早々引取安座いたし候やうくれく頼入存候、就而者能々使之者を以不取敢申遣候事

辛未八月十六日 久松定昭 花押

なる<sup>3</sup>。「旧知事手書ヲ齎ラシ家令某ヲシテ諭鎮セシ」めんとしたが、農民は、「猶之レヲ聴カス終浮穴久米両郡」に

まで騷擾は「憑凌」するに至った<sup>4</sup>。八月十八日、事態を重くみた松山県は、「少属重松約山<sup>当事久方</sup>家令某等」を、農民

の「屯集ノ所ニ」派遣し、「再ヒ懇諭」させたが、かえつて、重松は、「兇徒ノ為ニ傷ラ」れ、「家令某亦説諭ノ道ヲ

得スシテ去ル」という状況であり、さらに、蜂起した農民は、「同夜久米郡鷹子村ニ転集し」、「久米浮穴両郡之レニ

応シ各村ヲ煽動シ各村里正組頭ノ家ニ闖入シ家屋ヲ毀シ牒簿ヲ焼キ甚キハ之ヲ放火スルニ至ル其暴乱猖獗言ヘカラ

ざる状況となった<sup>5</sup>。八月十九日には、「旧知事」が、自身で「温泉郡桑原村ニ到リ渠魁ヲ呼テ之ヲ諭シ」たこともあつ

てか、「稍勢焰ヲ斂ム」るに至ったが、「他ノ兇徒等兇鬼ヲ携ヘ各村ニ横行シ」、ついに、「同日午后久米郡官舎<sup>久米浮穴</sup>

両郡ヲ皆シ<sup>事務ヲ取扱フ所</sup>ニ火ス」るに至った<sup>6</sup>。事ここに至り、松山県は、「其説諭ヲ以テ鎮定ス可ラサルヲ知り」、八月

二十日、「兵ヲ出シテ之ヲ鷹子村ニ邀ヘ撃」ち、「兇徒傷ク者数名乃チ四方ニ逃散」し、「尋テ巨魁山ノ内才十……等

数名ヲ縛シ」、ここに「全ク鎮定」するに至った<sup>7</sup>。その後、松山県は、「久米浮穴二郡ノ放火及乱暴者ノ重立者ヲ代ル

代ル引出シ青竹等ニテ毆チ乍ラ仮紮シヲ終リ、其罪跡アル者ハ直ニ松山北屋敷ノ獄ニ送り罪跡ナキ一時ノ嫌疑ノ為捕

縛ニ係ルモノハ悉皆放免トナ」し、また、「久米各所ノ民家ニ集合スル多人数ヘ対シ兵隊ハ要所要所ヲ固メ」、これを

「二ヶ所ヘ集メ置、携ヘタル竹鎗鉄砲脇差類ヲ取揚ケ竹鎗二ヶ所ニ積ミ重ネタルニ、小家ノ高サニ及ビ火ヲ放テ之レ

ヲ焼棄シ鉄砲脇差ノ類ハ縄縛リトナシ駄馬数匹ニ負ハセ松山ニ送り、兵隊ハ喇叭ヲ相図ニ総人員ノ出入口ヲ固メ……

各村頭取人ノ氏名ヲ呼び捕亡係リ一々之ヲ取ツテ他ニ移シ」た後、「強訴ノ重キ法度タル事ハ各承知ノ事ニ有之ベク、

然ルニ今度兵機竹鎗等ヲ携ヘ多人数強訴ニ及ビ剩ヘ上ミヲ憚カラザル所業少ナカラズ、因テ嚴重ノ所置ニ及ブベキ処、

前非ヲ悔ヒ謹慎ノ体相見ヘ候ニ付、一ト先ツ帰村致サセ候条精々職業ヲ励ミ、謹テ後チノ差図ヲ相待申スベキ事」な

る一文を読み聞かせたうえで、「兵隊ハ道路ノ両側ニ列ヲ換へ、一村毎ニ組頭引繼メ帰村ノ途ニ就キタリ……其人員凡四千、兵逐ハ続ヒテ松山軍務局ニ引揚ゲ」、騷擾も一段落をつけることとなった。<sup>85</sup>

さらに、「強訴人帰村后、四五日ヲ過ギ、松山藩内諸郡別々ニ庄屋長百姓ヲ久松家ノ邸内ニ召」集し、旧藩主久松定昭より、直接「告諭」がなされたが、その内容は、前述の八月十六日附の「旧知事手書」と同一であつたようである。<sup>86</sup> なお、この後のことではあるが、定昭は、九月二十日、このたびの騷擾について、東京府に対し、次のごとく進退伺を提出している。<sup>87</sup>

先般廢藩置縣免職帰京被 仰出候ニ付テハ僻土無知ノ人民時態ヲ不弁候ヨリ私儀帰京ヲ差留候趣申立久米浮穴両郡農民共出村仕候ニ付大少參事説諭ノ為メ出張仕猶私儀モ罷出百方説諭ノ道ヲ尽候得共元來頑固ノ民情且多人数ノ群集未迄ハ言語モ相届不申候処往々告諭ノ次第承伏ノ者モ有之候得共心得違ノ向ハ処々放火且及暴動候ニ付県庁ヨリ出兵致一旦退散致候得共其後猶又諸郡出訴ノ体ニ付時ヨリ分追々ニ私邸へ呼寄懇ニ説諭仕去ル十一日出船ノ節ハ恭順罷在聊妨碍ハ不仕候処跡ヲ逐ヒ上京出訴ノ者モ有之右様立至リ候条必竟私儀兼テ申付方不行届ヨリ差起り候儀ト恐縮ノ至奉存候依之進退奉伺候以上

辛未九月廿日

従五位久松定昭

東京府御中

これを受けた東京府は、翌二十一日、これが取扱方を、太政官に次のごとく伺い出た。<sup>88</sup>

従五位久松定昭進退伺ノ儀別紙ノ通差出候ニ付御廻申入候可然御指揮有之度此段申進候也

辛未九月廿一日

東京府

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

史官御中

これに対し、太政官は、発令年月日は不明であるが、次のごとく指令した。<sup>10</sup>

進退伺出ニ不及旨可相達事

この指令に従って東京府は、十月十九日、定昭に対し、「御伺不及其儀旨」を達したようである。<sup>11</sup>

これと相前後して、逮捕者に対する取調も本格的におこなわれたようであり、松山県は明治四年十一月十五日、騒擾の発生地であつた浮穴、久米の二郡が、府県の大幡な整理統合に伴い、同県の管区から、宇和、喜多、伊予の三郡とともに、改置された宇和島県の管区となつた後<sup>12</sup>も、「両郡共依旧元松山県ニ而支配致居候」<sup>13</sup>状況にあつたため、司法省に伺い出るべく騒擾の中心的人物であると判断した山之内才十、田中藤作、相原喜助、越智源蔵、越智喜代助、藤原安右衛門および西原藤次の七名の「御仕置伺書」を作成し、「明治四年未年十二月」附で、司法省に提出せんと準備したようであるが、いかなる理由によるものかは不明であるが、ついに同県から提出されることはなかつた。

その後、松山県は、明治五年二月九日、旧藩名を冠する県名では、人心を刷新し、旧貫を打破して諸改革を断行するにはふさわしくないと理由で、石鉄県と改称されることとなつたが、その当日、松山県改め石鉄県は、もともと松山県が提出すべく作成した処刑伺を、次のごとく司法省に提出した。<sup>16</sup>

御仕置伺書

石 鉄 県



別紙御伺申候浮穴郡久米郡暴動兇徒之儀取調中右両郡者新置宇和島県管轄被

仰付候ニ付同県江可引渡与処分差扣居候処未速ニ請取渡之運ニモ至兼両郡共依旧元松山県ニ而支配致居候ニ付右  
処分遅々相成候而者不都合不少候間此段御伺申候越智郡風早郡之分者既ニ処置可致之処其旨趣久浮両郡ニ相類候  
得共終ニ其事ヲ不果兇徒聚衆律ヲ以難論其他新律正条無之候間旁以同時御伺申候右両条共処置遅延相成居候儀ニ  
付何卒至急御差図可被成下候以上

壬申二月九日 元松山県

司法省御中

元松山県浮穴郡久万山日之浦村  
百姓山之内才十久米郡北方村百  
姓田中藤作同郡苅屋村百姓相原  
喜助越智郡野々江村百姓越智源 御仕置伺書  
蔵同村組頭越智喜代助同村百姓  
藤原安右衛門風早郡庄村百姓西  
原藤次

元松山県

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

元松山県浮穴郡久万山日之浦村百姓長助弟山之内才十久米郡北方村百姓磯右衛門 - 田中藤作同苅屋村百姓相原喜助越智郡野々江村百姓越智源蔵同村組頭越智喜代助同村百姓藤原安右衛門風早郡庄村百姓西原藤次吟味仕候処左之通

浮穴郡久万山日之浦

村

百姓長助弟

辛未九月廿九日入牢

山之内才十

当未廿五歳

久米郡北方村

百姓磯右衛門 -

辛未九月廿五日入牢

田中藤作

当未三十一歳

同苅屋村

百姓

辛未十月廿九日入牢

相原喜助

当未三十五歳

越智郡野々江村

百姓

辛未十月廿七日入牢

越智源藏

当未三十六歳

同 同村

組頭

辛未十月廿七日入牢

越智喜代助

当未四十三歳

同 同村

百姓

辛未十月廿七日入牢

藤原安右衛門

当未四十二歳

風早郡庄村

百姓

辛未十月廿七日入牢

西原藤次

当未三十二歳

右才十儀前知事久松從五位之東婦ヲ阻ム力為メ兇徒ノ首トナリ浮穴郡久万山ノ農民ヲ煽動シ多衆ヲ集メ及出村候段不届ニ付絞罪可申付哉

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

右藤作儀浮穴郡久万山ノ農民出村久米郡動揺之際水泥村租税掛官員出張所ニ火ヲ放チ候段不届ニ付絞罪可申付哉

右喜助儀右同断出張所ノ余火ヲ以同所夫卒小屋ニ移シ尚久米郡平井谷村庄屋同郡畑中村庄屋宅外ニ於テ自余之者諸帳面焼捨候節又々余火ヲ以右庄屋宅ニ相放チ候段不届ニ付絞罪可申付哉

右源藏儀前件久万山農民出村ノ拳ニ倣ヒ兇徒ノ首トナリ余村ヲ促シ多衆ヲ集メ及出村候段不届之儀ニハ候得共是ヲ久米浮穴ノ徒ニ比スルニ其情輕キニ似タリ故ニ兇徒聚衆条ニヨリ一等ヲ減シ流三等可申付哉

右喜代助安右衛門右同断之節専ラ賛成スル者ニ付源藏ニ一等ヲ減シ徒三年可申付哉

但右源藏以下兇徒聚衆之条ニ適宜ノ目無之且他律援引比較可致の条モ無御座候ニ付相伺申候

右藤次儀前件同様聚衆企ルハ源藏同様之罪状ニ有之候得共事全ク成ラス候ニ付一等ヲ減シ徒三年可申付哉  
右之通御座候御仕置之儀別帳口書七冊相添此段相伺申候以上

明治四辛未年十二月

元松山県

浮穴郡久万山

日ノ浦村

百姓長助弟

山之内才十

当未二十五歳

右申口

一私出生者久万山日ノ浦村百姓金十郎三男二御座候父儀六年以前病死仕兄長助家続仕当時同人夫婦甥一人姪三人私都合七人暮ニ而御高一石程所持仕百姓渡世ニ御座候処私地盤不辛抱ニ而兄申前ヲモ不相用兎角不機嫌ニ付去歳八月頃ヨリ兄手元ヲ相離レ同山沢渡村伯母聲市太郎方并大味川村辺所々行泊ニ而小間物売事仕其日相過居申候然ル処此度久万山村々之者共歎願之筋有之私儀頭取与相唱村々催促出村強訴致候儀ニ付去ル十九日久米郡南久米村ニ而御召捕今日御呼出被仰付右歎願強訴之次第遂一可申上旨御吟味被仰付奉畏候近来御政事御改革ニ付而者当春神社仏堂御取閱之上多分可取除御沙汰相成候処当山分者谷深ク村々家並モ懸隔殊更田畑作配等モ人家隔魅所坏唱候場所間々有之候ニ付作番其外夜使等ノ者内心社堂ヲ頼トシテ往返仕病氣等之節ハ祈願ヲ以相凌候向モ御座候処右等之便ヲ失イ候儀ニ付何卒其俵差置度与女子供ニ至ルマテ明暮相歎毎々寄合評議共仕一同出訴致候様子相聞候処其後畑畝竿入之儀モ有之哉ニ而又候心配仕居候内廢藩知事様御免職減知相成近々御帰京被遊候趣承リ候処前条歎願之次第モ有之候ニ付御発途御止メ申度旨相歎御取揚無之節者久万山江マテ迎取百姓中割出米ヲ以御家祿等モ相備以前之通御支配御歎申上相叶候ハ、一山之者共大ニ為成候儀与存付八月差入頃大味川村江罷越候砌藤右衛門方江立寄右等荒々相嘶御止メ申度歎願致度趣相嘶候処同人儀モ尤之儀与同心仕候然ル処其後大洲御配下百姓共モ

御城下江出訴致歎之趣御聞届相成候哉ニ承り候ニ付御当方モ君様御発途後ニ而者何事モ相整間敷候ニ付早々出訴可致含ニ而村々心当之者共江相談可仕与存同十二日頃外用向ニ而上黒岩村江罷越候途中仕出村組頭武八郎与申者ニ出逢同人久万町江歎願罷出候様申ニ付幸与存右次第相嘶尚同人宅江モ罷越追々相嘶候内同人ヨリ誰歎先立申立候者無之哉ニ申ニ付私儀先立歎願可致旨申聞置其後沢渡村并太仕出村伝太七鳥村久之右衛門同長瀬組初三郎同竹谷組利藏同清右衛門大味川村勝次郎并江相談仕候処何レモ同心仕候尤前条村々ニ而毎々寄合稍出訴之内存モ有之候折柄誰申トモ無之追々移合候哉無何与騒ケ歎相成候ニ付村々相談落合次第東川七鳥等之者共者七鳥村長瀬与申辺江出会候様申合尚村々印トシテ有合之幟歟之柄等所持仕候而可然様申候儀モ御座候而私儀者其砌大味川村伊之助方江逗留仕居同十五日夕剋東川七鳥等之者右長瀬マテ出掛候趣承及候ニ付私儀モ出足七鳥村氏社マテ罷越候処最早多人數相集居夫ヨリ思々立別レ仕出有枝黒岩之村々催促同夜久万町村江罷出同村法念寺江屯集外村々出揃次第歎願之旨趣評定可致存居候ニ付東川村彦右衛門有枝村名前不存者呼寄村々不相揃内不騒立様取鎮方致呉候様申聞候儀モ御座候辺ヨリ自然私ヲ頭取之体ニ持成日ノ浦西谷籍川柳井川等江催促之手紙相認差遣申候尚又知事様江歎願之儀ニ付他郡内ニモ罷出候哉モ難計其節混乱間違等有之候而モ不相成与存久万山一山之目印トシテ久万町村紺屋江相談幟取拵浮穴郡久万山之文字ヲ書法念寺江建置候処東川村高山組郷簡半左衛門与申者ヨリ右等歎願之儀ニ付幟等押立候而ハ不都合之趣面倒ニ申候様承り候ニ付否取除申候尚又十六日十二字頃久万町高橋屋与兵衛与申者仕出村梅木百太郎ヲ以郡御役人中ヨリ屯集之者共江用向有之罷通度旨申出候処未タ不參之村方モ有之一同出逢評定相究り候ハ、久万町御出張所江歎願之次第申出御城下迄モ引纏貫度并与存居候処右様評定不相整以前私儀若御差押ニ共相成候而者不都合与存候ニ付一同相揃不申何事モ御返答難相成旨相答其後久万町会所詰万右衛門与

申者ヨリ右百太郎ヲ以上々御役人中様モ御登山ニ相成候ニ付何用之儀モ久万町村ニ而御竊申上候様可致旨申出候得共是又前同様相答申候尚又久万町村喜久屋樹太七郎<sup>与</sup>申者モ罷越一同歎願之儀ニ付而者何共取次可遣知事様御登京御止メ申度趣書面ニ相認候ニ付此通承知ニ候得者相鎮<sup>リ</sup>居候様申聞下書等所持東風西風申諭候得共取合候者モ無之私儀遅参之村方<sup>江</sup>催促可致<sup>与</sup>存右百太郎<sup>江</sup>相頼仕出村之者<sup>江</sup>申聞貫候得共取合不申其俣相成候処同日夕剋右遅参之儀ニ付一同ノ者ヨリ私<sup>江</sup>大味川畑ノ川等之者今以不罷出兼而申合居候様申候儀者全ク偽ニ可有之旨嚴敷申出口々面倒ニ申ニ付私儀直ニ罷越引連参候様申候処一同ヨリ私可逃去モ難計何レモ同道致候様申騷立候ニ付私儀窃ニ身支度仕欠出候ヲ逃去候趣ヲ以多人數追欠参<sup>リ</sup>候得共漸駈延畑ノ川村迄罷越候処同村之者共多人數出掛居候ニ付何故早々不罷出候哉ニ申聞候処右之者申前二者與分之者不罷出候ニ付相待居候様申大味川村之様子承<sup>リ</sup>候得者同村之儀者前文清右衛門儀大庄屋場説得ヲ請出村手留メニ罷越候故遅参之趣申ニ付右様之訳ナレハ当夜之事ニモ至<sup>リ</sup>兼可申最早一同<sup>江</sup>之申訳モ相立候儀ニ付引返シ可申<sup>与</sup>存久万町<sup>江</sup>立戻候得共同所参集之者一人モ居合不申最早明神村迄迄押出候様相聞候処右様不参之村方モ有之歎願之趣モ不相決騷立甚不都合<sup>与</sup>存候得共致方モ無之<sup>与</sup>存明神村<sup>江</sup>罷越候途中右畑ノ川之者共追々出掛候ニ付同道罷越候処先途之者共入野久万町両明神ヲ加工東明神村蔵元ニ相集居上黒岩村栄蔵<sup>与</sup>申者ヨリ私出奔之跡ニ而一同離散致掛候ヲ漸相纏<sup>メ</sup>是迄押立候様申何レモ竹鎗鉄炮等所持窪野村之者共モ煽動翌十七日未明久谷村井手口迄立越申候然ル処朔夜以来御直書到来之趣ニ而久万町村ヨリ御引返シ相成御役人中様ヨリ御披露有之趣ニ付有枝村檜垣内記右百太郎栄蔵寛右衛門坏取静方仕何レモ御読聞之趣奉畏引色モ相見候折柄騎馬之御方一人群集之中<sup>江</sup>被乗切一同驚キ押倒シ怪我等致候者モ有之哉ニ而大ニ混雜之折柄歩立之仁<sup>モ</sup>被参百姓共之内多人數追欠喧嘩等出来候歟ニ而又候騷動<sup>与</sup>相成其砌野尻日ノ浦柳井川西谷

久主緒川之一群押掛參候処御直書之趣モ不相弁候者共故今一応御説聞モ可有御座儀ニ候得共何分多人數動揺致候儀ニ付重信河原杯ニ無之候而者何分離行届趣ニ申者モ有之右等之御含ニ御座候哉御役人中様者御引上ケニ相成候処右惣群凡二千人余思々押出シ申候且又井手口ニ罷在候御皆脇浮穴郡内村々之趣ニ而十人二十人程宛見舞ヲ相唱挨拶ニ罷越候向モ御座候右惣群誰差配トモ不相分高井村久米村等<sup>ニ</sup>相別候ニ付私儀者久米村之方<sup>ニ</sup>罷越候処多人數之儀并余郡之者罷出混乱不相成様可致<sup>与</sup>存私儀南久米村鷹子村寺方百姓家<sup>ニ</sup>立宿相頼配入休足爲仕置私儀者南久米村名前不存店家ヲ頼休足仕居同家二階ニ者西谷村庄屋竈原亀十郎黒岩村又左衛門等罷在右内記栄蔵覺右衛門等折々出会仕同十七日夜分浮穴郡<sup>村々</sup>方組頭之趣ニ而兩人罷越同郡之者共高井村西林寺ニ屯衆罷在候処久万山人數之内二百人借用致シ不參之村々催促致度段申出候ニ付承知之旨返答仕兩人者引取申候同日奥平様其外御家中御隠居様方御入込歎願之筋ニ付而者一村ヨリ西三人宛罷出余者速ニ引取可申趣ヲ以色々御諭相成可引取様ニモ相成候ニ付浮穴郡内<sup>江</sup>約束人數之儀者相断可然<sup>与</sup>存翌十八日朝栄蔵覺右衛門相談仕上黒岩村梅太郎沢渡村平三郎兩人ヲ以西林寺迄断遣置申候扱又同日二字頃ヨリ久浮之動揺甚敷數々出火等モ有之殊ニ兵隊御操出右御説諭ニ相背キ候者ハ御討私可被成御沙汰ニ付多分相恐早々引取度含モ御座候得共久浮乱妨之儀ニ付而者進退当惑仕居候処内記覺右衛門儀御城下<sup>ニ</sup>參候ニ付帰候迄者引弘申間敷様申聞御城下之方<sup>ニ</sup>罷越候趣ニ付見合居候内同十九日久米村八幡社境内ニ而御召捕相成候次第ニ御座候然ル処右一件ニ付而者兼々厚ク申合私共者其場之頭取而已ニ而外ニ密々差配向等致居候者可有之不包可申上旨嚴敷御糺方御座候処私發意之儀ハ前条申上候通り合祀等之儀ニ付無摠情合モ相發殊ニ大洲管内ニ而モ一同歎願御聞届モ有之哉ニ承リ尚久万町辺<sup>江</sup>乱妨ニ參リ候哉ニモ相聞候ニ付前件相談仕候処何レモ内存有之候哉存外之動揺<sup>与</sup>相成候儀ニ而余ニ深々申合候者等ハ一切無御座候得共旧知事様<sup>江</sup>御



直歎願仕以前之通穩便之御政事ニ預リ申度存久万町村江罷出候得共右様行違何之評議モ不相決動揺而已与相成銘々存付俣之取計モ可有之哉ニ付私不相并向數々御座候乍併強訴徒党之儀者御大禁ニ有之候処御時節柄ヲモ不相憚歎願ヲ申立剩兵器ヲ携衆ヲ舉リ県庁ヲ侮リ旧知事ヲシテ可迎取杯全拒敵之所業不届至極之旨被仰聞候而者一言申披之筋無御座斯御苦勞罷成甚以恐入候御儀ニ御座候右之儀ニ付如何体御裁許被仰付候而モ一言之申分無御座奉誤入候

未八月

久米郡

北方村

百姓

磯右衛門 -

田中藤作

当未三十一歳

右申口

一私儀當時家内者父五十二歳私夫婦倅一人都合四人暮ニ御座候然ル処八月廿五日御差押之上今日御呼出被仰付久米郡動揺之砌放火致候次第有体可申上旨御吟味被仰付奉畏候久万山村々百姓歎願筋ニテ追々出村致郡内之者共俱々

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

出村不致向者居宅焼払候様風説仕候ニ付テハ一紼心配仕居候処同十八日十一字頃瀬川村之者共多人數村方庄屋迄押掛参り早々罷出候様村方小走り共ヨリ申参り否罷出候処松瀬川村之者共庄屋宅<sup>五</sup>少々乱妨共致居候ヲ村方之者共押立山之内村ヨリ樋口村志津川村<sup>五</sup>順村仕同処ニテ酒ヲ給罷出候処同村御制札場<sup>五</sup>多人數打寄竹鎗杯ニテ押崩居候得共私儀者否北梅本村<sup>五</sup>罷越候処庄屋宅<sup>五</sup>多人數乱妨致居候ヲ見受其俣大野<sup>五</sup>罷出又々酒ヲ給候内水泥村租税課御役所<sup>五</sup>多人數押参り候ニ付私儀モ同道罷越見請候得者銘々竹鎗棒杯ニテ処々及破却口々ニ火ハ無之哉<sup>五</sup>申ニ付給醉居候場ヨリ側ニ居合候村方清右衛門<sup>五</sup>申者<sup>五</sup>私ヨリ火ヲ持参候様申聞候処同人儀瓦<sup>五</sup>火ヲ入参り私請取御役所玄関前ニ取捨有之候絹蒲団ヲ破綿<sup>五</sup>包ミ火ヲ吹付候テ燃出シ候否村方嘉七郎儀藥ヲ持参り焚付其余之者共モ追々戸障子杯ヲ持掛ケ右燃付居候火ヲ銘々内台所板間<sup>五</sup>持参り候処同所ニ罷在候者共ヨリモ品々取掛追々大火ニ相成候ニ付私儀者恐敷存否表<sup>五</sup>逃出居候内外人数モ表<sup>五</sup>出夫ヨリ私諸共水泥村庄屋<sup>五</sup>罷越候処於同家モ帳面杯焼居候ニ付私儀ハ直ニ久米村迄罷越候処翌十九日朝兵隊御入込相成候模様承り否逃帰居候処右様御差押相成候次第第二御座候右等猥ニ出村仕剩<sup>五</sup>租税課放火仕候段不埒至極之旨御押方御座候テハ申披之筋無御座斯御苦勞罷成甚恐入候御儀ニ御座候右ニ付如何様被仰付候テモ一言之申分無御座奉誤入候

未  
十  
月

久米郡

苅屋村

百姓

相原喜助

当未三十五歳

右申口

一私儀當時家内夫婦二三人都合五人暮二御座候田畑四反余所持仕居申候然ル此度御召捕相成今日御呼出被仰付久米郡動搖之砌所々放火致候次第有体可申上旨御吟味被仰付奉畏候八月十八日浮穴郡<sup>井</sup>郡内之者多人数村出致追々順村二押寄誘引出シ尤罷出候ハ、放火致候様專ラ風説有之候処同日十二字過右多人数追々村方<sup>江</sup>近寄候二付村方之者共者村境迄罷出相揃候方可然様申合大野下外レ平井川迄罷出候処無間モ多人数大野<sup>江</sup>押寄參り同所酒造家ヨリ酒相振舞候ニ付私儀モ罷越酒ヲ吞候処殊之外酩酊仕夫ヨリ多人数同所租税課<sup>江</sup>押寄乱妨致候様子ニ付私儀モ跡ヨリ罷越熟酔之余リ前後不相覚荒廻リ候内御役所<sup>江</sup>放火致候由ニテ燃出候ニ付私儀藥ヲ握リ右燃火ヲ付同所夫卒小屋<sup>江</sup>持參り疊積重<sup>子</sup>有之候小口<sup>江</sup>放火仕夫ヨリ多人数<sup>一</sup>緒ニ水泥村<sup>江</sup>罷越同村庄屋ニ而放火致候得共私者相携不申夫ヨリ多人数村方<sup>江</sup>罷越庄屋宅<sup>江</sup>乱妨之上放火致候ニ付村方之者共色々相防長屋斗焼失仕居宅者相防申候夫ヨリ平井谷村<sup>江</sup>多人数<sup>一</sup>緒ニ罷越庄屋宅ニ而乱妨仕押入之戸ヲ叩外シ候処帳面数々有之候ニ付取出シ尤同家前ニ而多人数帳面焼捨居候ニ付同所<sup>江</sup>持參り火中仕右焼掛帳面竹鎗之先<sup>江</sup>掛庄屋宅庭建具等散乱之中<sup>江</sup>持參候処外多人数追々建具等持掛大火ニ相成同家焼失相成申候夫ヨリ畑中村<sup>江</sup>押寄同村庄屋宅<sup>江</sup>參り候処最早余人乱妨致建具大半破却相成居同家前少シ相隔リ帳面焼捨候場所<sup>江</sup>相見焼残リ少々燃居候処<sup>江</sup>何レ之者歟表庭萩垣ヲ崩シ持掛火勢盛ニ燃出候ニ付私儀右燃掛之萩ヲ竹鎗ニ掛同家<sup>江</sup>持參り内<sup>江</sup>投込候処外多人数建具疊等追々持掛大火ニ

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

相成尚又右燃掛之萩持参り同家長屋葺軒端江燃シ付居宅長屋共焼失相成申候夫ヨリ久米村江罷越休息仕翌十九日朝兵隊御差向相成候ニ付逃去帰宅仕申候右申上候通相違無御座候右様猥ニ村出仕数ヶ所放火致焼失仕斯御苦勞奉備候段奉恐入候此儀ニ付如何体被仰付候而モ一言之申分無御座奉誤入候

未  
十月

越智郡

野々江村

百姓

越智源蔵

当未三十六歳

右申口

一私儀御呼出被 仰付旧知事様御帰京被遊候ニ付而者種々惡説申触村方動揺為致候様相企候次第有体可申上旨御礼方被成奉畏有俣御答申上候当八月十四日頃旧知事様御扶持モ無之様相成候坏様々之惡説仕同廿日久万山村々モ動揺仕候ニ付当村方ニ而モ竹鎗草鞋等拵置候様組頭喜代助ヨリ被申聞候旨私組合伍長ヨリ被申聞候ニ付拵置候処廿四日知事様御武運長久二夜三日之御祈禱ヲ氏社ニ而仕村中一統<sup>18</sup>参詣同所ニ而色々之空説致居候処直吉ト申者ヨリ此度御支配違ニ相成候様子ニ有之候処太政官付歟又ハ知事様付歟ト同人ヨリ相尋候ニ付永年御厚恩ニ相成居候ニ

付知事様江付候様相答候処右氏宮ニ而誰ト無ク百石ニ付牛壹疋人三人宛異人江御渡相成候説有之候ニ付左様之儀有之候而者恐敷次第ト存庄屋ニ有之候版籍帳借置候様私安右衛門ヨリ發言仕一統江相談仕候処承知致候ニ付小走ヲ以村中一紬人氣立居候ニ付旦那様モ壹本之木ニ乘呉候哉ト庄屋所江申遣候処承知之旨申帰候故一紬庄屋宅江罷越私ヨリ版籍帳ヲ始割帳根方帳其余役場帳面拾壹冊借度段申出候処庄屋元御承知二者相成候得共肥海村預之帳面モ有之候ニ付是者明朝迄ニ取寄可申答ニ而仙助ト申者十一冊之請取書相整申候処中ニハ借り不申候方宜敷ト申出シ候者モ有之候ニ付先借方延引仕候右様帳面借度存意者夏以來村入用等モ過分ニ存足元付披見致度儀モ有之候ヨリ申出候様ニ御座候然ル処出村仕候ハ、難洪村之儀ニ付藏米ヲ取出シ可申相談私安右衛門ヨリ申出若シ出シ呉不申候ハ、御藏預并鍵預リ庄屋家共卷倒シ可申扨ト色々申合右評議振台村豆腐屋辰次鍛冶屋勘三郎共江モ申通其夜者相開キ翌廿五日三島明神様江御武運御長久之御祈禱仕村中モ守ヲ受取帰廿六日昼夜合祀相成居候小宮ヲ旧地江取寄候儀私始直吉安右衛門瀬助共申合取計同日夕方氏宮エ寄合拾人組ニ而貳人宛相殘候方之圖取仕廿七日朝大通寺ニ有之候阿弥陀様ヲ旧寺エ取帰掛ケ台村直助ト申者ニ出逢同村出村之様聞合候処未何共相究不申様相答候ニ付同夜ハ極楽寺ニ而村中一紬通夜致寄合居候中江村方瀧之助ト申者私ヲ呼ニ參り候ニ付帰宅仕候処台村玉助直助友五郎又作藤吉都合五人之者ヨリ相咄申候ハ波止浜江八拾壹人御役人罷越候ニ付若シ当嶋江渡海乱妨共致候節者互ニ助ケ合呉候様申參候ニ付承知仕村方出村者朝日ニ相究メ居候旨右五人之者エ相咄帰宅為致又々極楽寺寄合之中エ參組内貳人宛表迄呼出シ今台村ヨリ申參候者波止浜迄八十壹人寄兵隊被參居候処最早当方エ御入込之様子菊間山鼻ヨリ御役人連ニ罷成弥実正ニ御座候ニ付若只今ニモ御渡相成候歟モ難計候間早々支度仕出村可致様申聞候処一紬之者モ承知仕騒立候処左候ハ、庄屋組頭共先エ立チ參候様掛合可申方之相談ニ相成候ニ付掛合候得ハ於

役場モ承知仕幟持挑灯持共組頭場ニ於テ夫々申付尚口惣村エモ明廿八日五ツ時出村仕候ニ付右刻迄ニ出掛ケ候様夫々江掛合仕老番太鼓ヲ早ク打チ貳番三番太鼓迄二者氏宮迄相揃候方之約定ニ而夫々帰宅銘々筒竹槍等ヲ所持仕出掛候処御役人相見エ仲間ヲ以村方之者両三人罷出候様被申越候ニ付誰レ行ケ彼レ行ト申合約リ私喜代助市之丞藤藏罷越候処御役人被申候者ケ様ニ一紡<sup>18</sup>相集リ騒立候而者旧知事様モ御心配被遊候ニ付歎願之筋有之候ハ、何共申出取次可申候間差扣候様被申聞掛ケ私喜代助相咄候者斯迄出掛候ニ付差扣エ不申方ニ申出シ四人相談ニ而罷帰一応夫々江為申聞候得共不聞入追々出掛ケ候節御役人御入込相成候ニ付早々出掛候様度度口惣村江申遣夫ヨリ台村迄罷越候処村方庄屋ト台村庄屋ト先行後行之口論相成候儀者私宅江台村ヨリ掛合ニ罷越候五人之者ヨリ波止浜迄八拾老人御役人御出ニ相成居候様子ニ付若被罷越候節者助ケ合具候様申參候儀ヲ波止浜迄被罷越候寄兵隊最早召捕ニ罷越候ニ付早々台村迄出掛參候様ト私申偽リ候ヨリ言葉違ニ相成詮ル処村方ニ而者私台村ニ而者私宅江掛合ニ罷越候五人之落度ニ相成候処江村方庄屋台村庄屋共ケ様ニ騒立候而者恐入候次第ニ付何分帰村可致様御諭ニモ相成其夜者夫々相開キ罷帰申候次第ニ御座候然トモ於村方先立チ動揺為致候様相企剩村役場差図ヲモ相拒聞入不申安右衛門俱々申合蔵米ヲ可取出坏ト発言致其上神仏手俣ニ旧地エ相戻シ村方而已ナラス外村迄動揺為致候段重々不埒之旨御押方御座候而者甚以恐入候御儀ニ付如何体御咎被仰付候而モ聊申分無御座奉恐入候

越智郡

野々江村

組頭

越智喜代助

当未四十三歳

右申口

一私儀御呼出被仰付旧知事様御発駕被遊候ニ付而者村方動揺致候次第有体可申上旨御糺方被成奉畏有仰御答申上候然ル処八月十九日越智嶋村々庄屋宮浦村会所江寄合仕候節村方株頭十助儀庄屋名代ニ罷越候処庄屋ヨリ被申聞候ニ者此度旧知事様御発駕之儀ニ付大見岡村瀬戸三ヶ村庄屋越智島惣代ニ而願書差出候間其旨村方江可申通様被申聞候ニ付翌廿日十人頭一紵<sup>18</sup>呼寄右之趣申聞其節久万山辺出村之趣承居候間此村方ニ而モ草鞋竹槍等ヲ拵置可申ト相談仕候処一紵<sup>18</sup>其儀ニ同意仕候処同廿四日村方八幡社ニ而旧知事様御武運長久之御祈禱仕度様磯右衛門与申者申参り候ニ付同心仕当日一紵<sup>18</sup>参詣仕候処其右衛門ト申者八幡社ニテ人牛ヲ異人江御渡シ相成候由風説仕候趣相談シ候ニ付然レハ庄屋江行キ割帳版籍帳借受置可申左候得ハ若シ人牛御渡相成候方ニ被仰出候而モ人別不相分候趣源藏ト申者發言仕候ニ付一同其儀ニ同心仕同夜帰リ掛ケ庄屋宅江参り村一紵<sup>18</sup>ヨリ割帳版籍帳貸シ貰度旨源藏并私ヨリ相談仕候処早速被貸遣候ニ付又々年貢帳モ貸貰度旨申候処右帳面者肥海村庄屋預リニ付聞合之上用達可申暫相待候様被申候ニ付承知仕其場引払夫ヨリ会所之藏米ヲ取出可申様源藏安右衛門發言仕候間先其儀者他村聞合之上ニ而取出シ可申様私市之丞ト申者ヨリ申聞候処皆々其儀ニ得心仕同廿五日三島明神江旧知事様御武運御長久之御祈禱仕其節銘々之守ヲ受帰宅仕候同廿六日朝百姓町人之者旧知事様御発駕御引留ニ罷出可申様張紙有之候由源之助与申者申出シ夫ヨリ弥出村可仕方ニ相談相究伍組之内壹人完相残候方ニ鬨引仕同廿七日夜御発駕御引留

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

二罷出候人別極楽寺江寄合仕出村之日限朔日与相定居候処其節庄屋御城下ヨリ御帰相成候ニ付一紵<sup>18</sup>様子承り候処御発駕御引留申候儀堅不相成旨御諭之趣一紵<sup>18</sup>被申聞候得共聞入不申庄屋先達ニ而引連出町致貴度旨一紵<sup>18</sup>ヨリ申出候処承知之趣ニテ御帰り相成申候然処台村ヨリ玉助直藏<sup>18</sup>申者罷越源藏ヲ呼出門口ニテ何カ相話シ其末組内ニテ兩人完門前迄罷出候様源藏申候ニ付罷出候処波止浜迄奇兵隊御出相成最早召捕ニ当島<sup>18</sup>被罷越候ニ付早々支度致台村迄出村可致様申聞候ニ付俄ニ支度仕翌廿八日出村仕掛候処御役人御出ニ相成御使ヲ以御呼ニ付私始罷出候処庄屋宅ニテ申聞候儀有之候ニ付一先相開キ候様被申聞候得共斯迄出掛候ニ付引取不申様途中ニ而私源藏共申合相談仕候処又々御使参り申候間先宮浦村迄参り其上ニ而御諭有之候得者同所八幡宮ニ而承り可申様申上置居村罷出其節台村近辺ニ於テ私差図ニテ炮発為致夫ヨリ台村迄参り候処居村并台村庄屋ヨリ御諭相成候ニ付一同引取帰村仕申候尤右村出之儀ハ源藏虚説ヲ相唱候ヨリ事起り候儀ニ而其次第明白仕候ニ付他村<sup>18</sup>者詫言仕右之通引弘候儀ニ御座候乍併私儀役前ヲモ乍勤右様竹鎗等ヲ拵置候様発言仕尚又御役人中御出之節モ早速御諭ヲ不聞入且前件炮発差図等仕候段夫々御押方ニ相成候而者恐入候次第第二御座候此儀ニ付如何体御答被仰付候而モ一言申分無御座奉誤入候

未九月

越智郡

野々江村

百姓



藤原安右衛門

當未四十二歲

右申口

一私儀御呼出被仰付旧知事様御発駕被遊候ニ就テハ村方動揺為致候次第有体可申上旨御糺方被成奉畏候然ル処八月二日頃久万山村々動揺仕候ニ就テハ村方ニテモ竹鎗草鞋等拵置候方ニ相談相究候旨私組合伍長場ヨリ被申聞候ニ付承知仕拵置申候其後八月廿四日氏社江御武運御長久之御祈禱仕一紵參詣同所ニテ誰ナク百石ニ付牛壹疋人三人ツ、異人江御渡相成候説有之候ニ付左様ノ儀有之候テハ恐敷次第存庄屋宅ニ有之候版籍帳借置申候ハ、人別相分不申候故取寄置可申方ノ相談私源藏ヨリ申出シ一紵江相談相掛候処承知致候ニ付小走ヲ以テ庄屋宅江村中一紵ヨリ御相談ノ儀有之候処御承知被成下候哉否ト申遣候処承知ノ旨申帰候故村中一紵庄屋宅江罷越源藏ヨリ版籍帳ヲ始其余役場帳面拾壹冊借度段申出候処庄屋元御承知ニハ相成候得共中ニハ借不申候方宜敷ト申出候者モ有之候ニ付先借方ハ延引仕夫ヨリ会所ノ藏米ヲ取出可申方ノ相談私源藏ヨリ申出シ若出呉不申候ハ、御藏預ノ庄屋家共卷タハシ可申抔ト色々申合候テ其夜ハ相開キ廿六日合祀相成居候小祠ヲ夫々旧地江取寄候儀私源藏直吉瀬助共相談仕夫々為取計其後極楽寺ニテ村中一紵通夜寄合仕居候中江台村ヨリ源藏ヲ呼ニ罷越婦宅致又々同人儀罷越組内二人ツ、門口迄呼出波止浜迄寄兵隊罷越居最早當嶋江召捕ニ罷越候ニ付村致候様申聞候ニ付一紵承知仕弥明廿八日五ツ時出村ト相究メ出掛候処御役人相見色々御掛合ノ儀ハ委細源藏喜代助ヨリ申上候通ニテ追々出掛候節筒持市之丞覺次喜代助瀬助林吉大徳一伊佐次吉之助共江炮発差図仕台村迄出村為致同所ニ而言葉違ニ相成候儀ハ

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

委細源藏ヨリ申上候通ニテ夫々相開キ銘々帰村仕候次第ニ御座候然レ共源藏俱々申合藏米ヲ取出可申抔ト発言致其上神仏手俣ニ旧地<sup>江</sup>相戻シ諭方御役人<sup>江</sup>対シ炮発差圖致候段重々不埒ノ旨御押方御座候テハ恐入候次第ニ付如何様御咎被仰付候テモ聊申分無御座奉誤入候

未十月

風早郡

庄村

百姓

直助事

西原藤次

当未三十二歳

右申口

一私儀今日御呼出被仰付旧知事様御発駕御引留申度存意ニテ他村之者<sup>江</sup>出村乱妨可致様相進候次第不包可申上旨御吟味被仰付奉畏候八月廿八日頃野間郡村々出村致候ニ付村方伍長共ヨリ上下難波村始近村出村致候迄決テ出村不相成様申聞相成居候処翌廿九日朝上難波村<sup>江</sup>太郎<sup>江</sup>申者ヨリ承候得ハ同村神田村ハ同夜出村可致趣ニ付私儀田途<sup>江</sup>参掛村方之者<sup>江</sup>右様相通明朝村方モ出村可致様相話候順々相通翌朔日朝出村同日昼飯前馬木村川筋土手迄罷越

同所ニテ中村嘉藏<sup>与</sup>申者ニ出逢此度之出村ハ何レ之御役人ヨリ帰村之儀被申聞候テモ引払不申様俱々相話村方<sup>江</sup>モ其趣申聞候様申合相別レ二日昼飯後私儀ハ馬木村<sup>江</sup>酒給ニ参リ夕刻右土手<sup>江</sup>罷帰候処村方源太郎<sup>与</sup>申者ヨリ先刻御役人様被参帰村可致旨被申聞一紡<sup>18</sup>帰村致候様申ニ付私ヨリ御役人様御出相成候テモ我罷在候ハ、帰村之返答ハ不致様一応相話一紡<sup>18</sup>同道ニテ同日夕刻帰村仕候翌三日朝御城下<sup>江</sup>用向有之参掛途中鴨川ニテ中村久吉<sup>与</sup>申者ニ出逢候ニ付私ヨリ十一日御発駕ニハ竹鎗ニテモ所持致是非共御引留ニ罷出可申哉ニ相話候処同人ヨリ同意之旨相答山分ハ我等先立村々相進罷出候ニ付下筋村々ハ私儀相進出村可致様申ニ付私承知之旨相答相別レ御城下<sup>江</sup>罷越同日夕刻帰宅仕翌四日祭礼ニ付昼飯後ヨリ北条町<sup>江</sup>買物ニ罷越同町海老屋半助方ニテ酒給居候処猿川村糸藏上難波村庄太郎利左衛門猪木谷村庄五郎追々罷越候ニ付私ヨリ十一日御発駕ニハ必御引留ニ罷出可申哉尤是非共御引留申候時ハ如何之動乱ニ相成候哉モ難計候ニ付鉄炮竹鎗等持参致候様相話候処何レモ同意之趣相答候ニ付若出村之節差留候者有之候節ハ右鉄炮ニテ打払罷出可申帰村掛ニハ前出村之節強テ差留候才之原ハ反地庄村庄屋ハ巻倒シ可申様相話候テ上難波村庄太郎<sup>江</sup>モ鉄炮貸與不申哉ニ相頼候処同人儀承知致與不申ニ付鉛一本ニテ玉何程出来候哉相尋候処四五十程相整候様申ニ付私儀ハ村持之鉄炮持参可致様申醉中之儀ニ付色々浮説仕夕刻皆々相別レ帰村掛北条池土手下ニテ猿川村八百藏<sup>与</sup>申者ニ出逢候ニ付同人<sup>江</sup>モ十一日ニハ鉄炮竹鎗ヲ持御発駕御引留ニ罷出不申哉ニ相話候処同意之趣相答直様相別レ行申候ニ付私儀モ帰宅仕翌五日昼飯頃ヨリ村方之者同道ニテ北条<sup>江</sup>神輿<sup>江</sup>拜ニ罷越夕刻八反地村国津比古社神輿還御拜ニ罷越候処同村庄屋家内之者罷出居候ニ付還御済同道ニテ右庄屋宅<sup>江</sup>参リ帰掛門前迄罷出候処同家亭主門田弥七郎帰宅仕候ニ付私儀少シ用向ニテ参リ候様申出候処左候ハ、内<sup>江</sup>這入可申様被申候ニ付同家座敷<sup>江</sup>通り居候内酒着等被差出如何之用向ニ候哉<sup>与</sup>相尋候ニ付余之儀ニモ無之十一日旧

知事様御出立之節ハ風早郡村々何レモ出村御引留可申様申ニ付私儀モ罷出申候積之処当家ニハ兼テ出村被差留候得共此度ハ先立ニテ同様被罷出候方可然若是迄之通御差留相成候ハ、此度出村掛風早郡山分狩人之箇三十四五挺モ有之ニ付外朋友<sup>五</sup>モ相通為持出出村掛当家モ巻倒シ可申尚是迄風早郡ハ庄屋モ多有之候ニ付減シ不申候テハ不相成様申出候処余ニモ私同様之説致候者有之候哉ニ相尋候ニ付私相偽外ニモ五六人有之御出立相成候得ハ御年貢ハ不相納様申居候ニ付何分私共<sup>五</sup>御同意可被成左候ハ、風早郡内ニテ大將故五拾俵位郡中ヨリ相渡可申様申出候処同人ヨリ必同意可致ニ付無腹臆委細相話吳候様申聞候ニ付重テ酒肴等持参之上委敷儀相話可申旨相答置帰宅仕出村可致含ニ罷在候処其後八日村中一紗<sup>18</sup>庄屋宅<sup>五</sup>呼ニ付罷出候処租税課御役所ヨリ御論書相下リ候趣ニテ決而出村不相成様庄屋ヨリ申聞有之候ニ付一紗<sup>18</sup>出村不致方ニ申堅メ爪印等仕置候ニ付私儀モ弥出村不相成様相心得罷在候処翌九日夜御召捕ニ相成候次第御座候併右様再度出村徒党ヲ企乱妨相働可申含ニテ不容易儀種々申触他村之者共<sup>五</sup>出村相進候ヨリ斯御苦勞奉備候段甚以恐入候御儀ニ御座候右ニ付如何様御答被仰付候テモ聊申分無御座奉誤入候

未  
十月

この伺によれば、山之内に對する量刑は、「兇徒ノ首トナリ……農民ヲ煽動シ多衆ヲ集メ……候段不届ニ付絞罪可申付」とあるところから、當時の現行刑法たる新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆<sup>19</sup>後段の

若シ地方ノ凶荒ニ乗シ。衆ヲ聚メ。良民ヲ擾害シ。官長ヲ挾制シ。及ヒ賑貸。稍遲キニ因テ。村市ヲ搶奪シ。官廩ニ喧鬧シ。及ヒ私憤ヲ懷挾シ。衆ヲ聚メテ。市ヲ罷メ。官ヲ辱ムル者。並ニ首ハ。絞。從ハ。流三等。其余ノ

附隨ハ。亦論スルコト勿レ。

なる規定に準拠し、その首犯として「絞罪」すなわち新律綱領の規定する「絞」と認定したものであろう。田中の量刑は、「租税掛官員出張所<sup>五</sup>火ヲ放チ候段不届ニ付絞罪可申付」とあるところから、新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆条前段の

凡兇徒。衆ヲ聚メ。村市ヲ毀壞焼亡シ。財物ヲ劫奪シ。若クハ。人民ヲ殺死スル者。造意ハ。斬。從ハ。流三等。從ノ手ヲ下シ。人ヲ殺シ。火ヲ放ツ者ハ。絞。其止タ附和隨行シ。場ニ在テ。勢ヲ助クル者ハ。論スルコト勿レ。なる規定に準拠し、「火ヲ放チ」なる事實に着目し、「絞罪」すなわち「絞」と認定したものであろう。相原の量刑は、田中同様、「出張所ノ余火ヲ以同所夫卒小屋<sup>五</sup>移シ……自余之者諸帳面焼捨候節又々余火ヲ以……相放チ候段不届ニ付絞罪可申付」とあるところから、田中と同様に新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆条前段の規定に準拠し、「余火ヲ以……夫卒小屋<sup>五</sup>移シ」および「余火ヲ以……相放チ」なる事實に着目し、「絞罪」すなわち「絞」と認定したものであろう。越智（源）の量刑は、「兇徒ノ首トナリ余村ヲ促シ多衆ヲ集メ及出村候段不届之儀ニハ候得共是ヲ久米浮穴ノ徒ニ比スルニ其情輕キニ似タリ故ニ兇徒聚衆条ニヨリ一等ヲ減シ流三等可申付」とあるところから、新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆条後段の「從ハ。流三等」なる規定に準拠し、從犯として「流三等」と認定したものであろう。もつともこの「流三等」を含み、新律綱領・名例律上・五刑条所定の「流刑三」は、新律綱領が頒布される以前の明治三年十一月十七日に太政官達をもつて府藩県に布達された準流法によつて、「一等徒役」、「二等徒役」および「三等徒役」に変更されているのであるから、正しくは、「流三等」ではなく、それに対応する「三等徒役」とすべきであらう。越智（喜）および藤原の量刑は、「専ラ賛成スル者ニ付源藏ニ一等ヲ減シ徒三年可申付」とあるところから、越智（源）

の量刑「流三等」すなわち「三等徒役」に、新律綱領・名例律下・加減罪例条の「減ト称スル者ハ。本罪条ニ就テ減輕ス……惟ニ死三流ハ。各同ク一減ト為ス。仮令ハ……流罪ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。徒三年ニ坐スルノ類」なる規定を適用して、「徒三年」と認定したものであらう。西原の量刑も、「聚衆企ルハ源蔵同様之罪状ニ有之候得共事全ク成ラス候ニ付一等ヲ減シ徒三年可申付」とあるところから、越智（喜）等の場合と同様の操作により、「徒三年」と認定したものであらう。もっとも旧松山県においても、前掲「御仕置伺書」の中に「但右源蔵以下兇徒聚衆之条ニ適宜ノ目無之且他律援引比較可致的条モ無御座候ニ付相伺申候」と記しているところから判断すれば、これらの擬律に自信があつたわけではないのであらう。

この石鉄県伺に対し、司法省は、明治五年二月十五日、伺を差し戻し、再調査のうえ、改めて提出するよう命じたようである。この結果、石鉄県は、五月十五日、次のごとくふたび伺書を提出した。

旧松山県所置擬断伺御不審之廉御訊問ニ付再調御届書

別紙於旧松山県所置擬断相伺候処御不審之廉有之御訊問ニ付即其廉々江朱書之上御応答申上候以上

壬申 石鉄県権参事桜井勉

五月十五日 石鉄県参事本山茂任

司法省

御中

一浮穴郡久万山日浦村山之内才十口書中上黒岩村栄蔵ヨリ云々ト有之候処同人口書無之於県地所置致候哉栄蔵モ魁首ニ近キ者之様相見候ニ付委細取調可申出旨

今般口書差出申候栄蔵ハ呵責見込之者ニ御座候（以上二十字朱書——中山註）

一久米郡北方村農田中藤作口書中私請取御役所玄関前ニ取捨有之候絹蒲団云々有之候処余人ハ諸帳面ヲ焼捨候者多分此者ハ官物ヲ焼候義ニハ無之儀昭細取調可申出旨

帳面焼捨ハ不致候得共彼ノ蒲団ヨリシテ失火ノ端ヲ為シ因テ租税課出張所焼亡即チ官物ヲ焼ノ首ニ御座候嘉七八流三等見込ノ者ニ御座候（以上六十一字朱書——中山註）

一越智郡野々江村喜代助口書私差図ニテ砲発為致夫ヨリ云々ト有之候処続ニハ役人ヘ対シ砲発致シ候ト有之候処唯方向ナク発砲ト大ニ分別有之候間昭細可申出旨

前発砲モ役人ヘ相对シ候所業ニ御座候役人トハ判任官ニ御座候（以上二十八字朱書——中山註）

一風早郡庄村西原藤治<sup>（マツ）</sup>口書中同意可致ニ付云々ト有之処同意ハ無擬同意致シ候哉又ハ聊無懸念致同意候哉取調可申出旨

租税課出張処一策ヲ設ケ同意セシメ其事情ヲ探知ランカ為ニ御座候（以上三十一字朱書——中山註）

壬申

五月

なお、この伺書には、司法省の疑問に答えるべく、前述の山之内才十の口供書の中に出てくる栄蔵（姓不詳）の口供書も添附されているが、それは、次のごときものである。

伊与国<sup>（マツ）</sup>浮穴郡

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考（中山）

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

久萬山

上黒岩村

栄蔵

壬申年三十八

去ル辛未八月知事様御免職御帰京被遊候ニ付而者村役人共申合歎願仕度趣申参リ候処外三ヶ村<sup>茂</sup>追々押掛参リ出訴之様子申聞候間再三相断候得共一統之事故無挽移合八月十五日晩時村方一同出立翌十六日朝ヨリ久萬山久万町御蔵元<sup>江</sup>凡八ヶ村斗屯集仕同夕方東明神村迄罷出候処知事様直筆ヲ以御家令公莊八郎平様御教諭之趣一剋<sup>茂</sup>早く引取候様無左候<sup>而</sup>者

天朝<sup>江</sup>被為対不被為済候旨被申聞候ニ付覚右衛門様<sup>与</sup>種々相談仕端々之者<sup>江</sup>迄申聞候得共何分大勢之儀故難行届終ニ承服不仕久谷村井手口迄押出シ候節私義無余儀付添罷越申候処又候公莊様御諭御座候得共村々弥大勢馳集夥キ勢ニ相成鉄炮竹槍幟挑燈等相携罷出候其畝租稅課御役人様<sup>江</sup>相向竹槍ヲ以追駈候者御座候処其内腕<sup>江</sup>疵を為負候を見受候ニ付私手拭ヲ以御介抱申上候処<sup>江</sup>中川内記<sup>与</sup>申者参リ早ク御帰相成候様申上候儀ニ御座候七鳥村古味組霍次<sup>与</sup>歟申者歟之柄ヲ以打擲仕候ヲ仄ニ相覚申候得共篤<sup>与</sup>承知不仕候公莊様猶又於井手口色々御諭被成候得共更ニ一統之者承服不仕公莊様始七人御帰否直ニ久米街道<sup>江</sup>相向久米町ニ而屯集罷在其内浮穴久米両郡追々馳集リ処々放火等勁発十八日同所ニ滞留仕居候処十九日十二字迄之内引取不申得者兵隊ヲ以御打払ニ相成候由ニ付大ニ怖敷存次第二井手口迄引退一泊仕翌廿日久萬山<sup>江</sup>帰着仕候儀ニ御座候且又東明神村ニおひて私共頭立山ノ内才十



何連江歟参り候跡ニテ大勢ヲ纏強訴ニ相運者セ候様御押方御座候得共全ク前文公莊様御論ニ付而者一統之者引取セ申度色々世話仕候訳ニ御座候乍併力および者須辺与里其俣付随ひ共々久米町迄罷出候段何共奉畏入候此儀ニ付而者如何体御咎被仰付候而茂寸分申上様無御座候

この石鉄県の再伺書に對し、司法省は、明治五年十月十八日附で、次のごとく指令した。

### 賊盜律兇徒聚衆新條例

凡多衆ヲ聚メ訟ヲ構ヘ官ニ抗スト雖モ良民ヲ擾害スルニ至ラサル者首ハ流三等ノ例ニ依リ首タルヲ以テ

准流十年 山之内才十

同律 従ノ手ヲ下シ火ヲ放ツ者

### 絞罪

田中 藤作  
相原 喜助

### 同律 新條例

官ニ抗スト雖モ良民ヲ擾害セサルノ従

越智 源藏

徒三年 越智喜代助

藤原安右衛門

発砲ヲ指揮スト雖モ殺意無キヲ以テ論セス

同上情輕キ者一等ヲ減ス

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

縣 青木 松本 徒二年半 西原 藤次

この司法省指令を分析すると、次のごとくである。

(一) まず、山之内才十の量刑に関する司法省指令は、当時、現行刑法として頒行されていた新律綱領の条項によることなく、新律綱領の改正草案として準備されつつあった新律条例に依拠している。すなわち、新律条例（第一次草案）第百六十五條（賊盜律・兇徒聚衆附例）の中の「凡多衆ヲ聚メテ訟ヲ構ヘ官ニ強逼スト雖モ良民ヲ擾害スルニ至ラサル者首ハ流三等」なる規定により、「流三等」を選択したうえで、新律条例（第一次草案）第七條（名例律・五刑附例）の中の「凡流刑地方未タ定ラサレハ姑ク流刑ヲ停メ五徒ノ外別ニ准流法ヲ設ケ獄則ニ照シ懲役ニ服シ限滿テ原籍ニ還ス……流……三等 准流十年」なる規定を適用し、「准流十年」と量定したのであらう。

(二) つぎに、田中、相原の量刑に関する司法省指令は、新律綱領・賊盜律・兇徒聚衆条の中の「凡兇徒。衆ヲ聚メ。村市ヲ毀壞焼亡シ。財物ヲ却奪シ。若クハ。人民ヲ殺死スル者。造意ハ。斬。従ハ。流三等。従ノ手ヲ下シ。人ヲ殺シ。火ヲ放ツ者ハ。絞」なる規定を適用し、「絞」と量定したのであらう。

(三) さらに、越智（源）、越智（喜）、藤原の量刑に関する司法省指令は、新律条例（第一次草案）第百六十五條（賊盜律・兇徒聚衆附例）の中の「凡多衆ヲ聚メテ訟ヲ構ヘ官ニ強逼スト雖モ良民ヲ擾害スル至ラサル者首ハ流三等従ハ一等ヲ減ス」なる規定により、首犯の法定刑「流三等」から一等を減ずることとし、これに、新律綱領・名例律下・加減罪例条の中の「減ト称スル者ハ。本罪上ニ就テ減輕ス。仮令ハ……徒三年ハ。徒二年半ニ坐スルノ類。惟ニ死三流ハ。各一減ト為ス。仮令ハ……流罪ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。徒三年ニ坐スルノ類」なる規定を適用して、「徒三年」と量定したのであらう。

(四) 最後に、西原の量刑に関する司法省指令は、前述の越智(源)以下三名の量刑の準拠となつた新律条例(第一次草案)第百六十五条(賊盜律・兇徒聚衆附例)の中の「首ハ流三等徒ハ一等ヲ減ス徒ニシテ情輕キ者ハ又一等ヲ減ス」なる規定により、越智(源)以下三名の量刑「徒三年」からさらに一等を減ずることとし、これに前述の新律綱領・名例律下・加減罪例条の「減ト称スル者ハ。本罪上ニ就テ減輕ス。仮令ハ……徒三年ハ。徒二年半ニ坐スルノ類」なる規定を適用して、「徒二年半」と量定したのであらう。

(五) 以上の關係者に対する司法省の量刑指令を石鉄県の処刑例と比較すると、山之内は、「絞罪」が、「准流十年」に、越智(源)は、「流三等」が、「徒三年」に、西原は、「徒三年」が、「徒二年半」にそれぞれ減輕されているが、田中、相原、越智(喜)および藤原の四名については、石鉄県例と司法省指令の量刑は同一であり、とくに田中、相原については死刑である「絞罪」が量定されている。これは、兩名が「火ヲ放ツ者」すなわち放火の実行犯であつたことが量刑に影響を与えたものと思われる。

かくして、この司法省指令により、關係者の刑は確定した。石鉄県は、前述のごとく、前掲『愛媛県史料』四十四・国史第四稿・石鉄県紀および前掲『愛媛県史料』五十一・国史第一一稿・刑罰などの石鉄県で作成した資料に収録されている山之内、田中および相原の口供書の末尾に、この司法省指令の量刑と同一内容の量刑が記載されているところから、直ちに刑の宣告をしたものと思われるが、その正確な年月日は不明である。

なお、絞刑が確定した二人のうち、田中については、明治五年十一月二十八日に執行されたが、執行後、遺骸を親族に引き渡した後に蘇生するという珍事が発生したことは、穂積重遠博士の紹介以来、手塚豊博士の研究や佐藤清彦氏による事実の解明などにより、一般によく知られているところである。これらの先業によれば、生き返つた死刑囚

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

たる田中藤作の処置に窮した石鉄県は、明治六年一月十七日、次のごとく伺い出た<sup>28)</sup>

○石鉄県伺

去辛未八月旧松山藩知事上京之節旧情ヲ申立郡邑動揺ニ及ヒ候折柄租税課出張所へ致放火候者当県下久米郡北方  
邑農田中藤作儀伺済之上昨壬申十一月廿八日絞刑ニ処シ候末親戚之者ヨリ願出候ニ付死骸下渡候所道程四里半余  
モ卑俤候後少ク脈動ヲ発シ漸々蘇生候趣訴出候ニ付致検査候所申出之通相違無之頗意外之事ニ付恐入候旨別紙之  
通聴訟課属ヨリ進退伺差出候何如処置可仕哉此段相伺候也

明治六年一月十七日

これを受けて司法省は、正院の指圖を受けるべく、明治六年四月九日、次のごとく伺い出た<sup>29)</sup>

石鉄県管民田中藤作ナル者犯罪絞刑ニ該リ已ニ壬申十一月廿八日法ノ如ク行刑シ其遺骸ヲ親戚ニ下付シ四里半ノ  
道程ヲ昇俤リ葬埋可致ト遺骸ヲ沐浴スルニ当テ少ク温氣アルヲ覺候処追々呼吸モ相通ジ遂ニ蘇生致候段届出候如  
此者固ヨリ律例ニ正条無之候得共天幸ニテ甦生セル者ヲ復絞スルハ甚情ノ所不忍ナリ乃チ人ヲ罪ニ出入スル者ハ  
罪ノ輕重ヲ論セス貼断スルコトヲ用ヒサル律例ヲ比照シ其俤放免シテ可然哉又ハ再ヒ本刑ヲ科シ絞罪可申付哉其  
死者復生スル如キ其処分ニ至テハ本省ノ権内ニ之ナク因テ其事由ヲ開具シ謹テ上裁ヲ取ル

しかし、正院は、この司法省伺に対して直接回答することをせず、逆に司法省に下問したようで、これに対し、  
司法省は、同年五月（日欠）、次のごとく上申している<sup>30)</sup>

旧石鉄県管民田中藤作行刑後蘇生致シ候儀処置方御下問相成候ニ付遂熟議候処右様ノ類例ハ固ヨリ無之候得共凡  
人ヲ罪ニ失出スル者ハ貼断スルコトヲ用ヒサルノ律例アリ譬ヘハ犯罪死刑ニ該ル者司法誤テ懲役ニ処断シタル時

ハ後之ヲ覺拳スト雖モ復タ死刑ヲ加ヘス失出猶然リ況ンヤ法ニ從テ刑ヲ行ヒ処分既ニ畢リ其後天幸ニ依テ蘇生シタル者之ヲ右律例ニ照準スルニ復タ罰スヘキノ故ナシ又聞洋曆千七百八十九年以前仏國ニ於テ絞罪ノ刑アリシ時モ蘇生シタル者甚稀少ナリト雖モ若シ之アルニ於テハ國王ノ特命ヲ以テ其罪ヲ免シ或ハ罪ヲ減スト然レトモ如此ハ格別ノ事ニシテ法律上ニ掲載スルモノニ非ズ唯法學者ジュース氏ノ著書中ニ記載有之趣因テ彼此ノ例ヲ以テ之ヲ考フルニ右藤作ナル者ハ特旨ヲ以テ放免相成可然ト存候此段省議申進候也

但藤作儀放免相成候上ハ蘇生ノ名目ヲ以テ原籍ニ編入為致可然ト存候

この上申にしたがい、正院は、明治六年六月九日、司法省に対し、次のごとく指令している。<sup>23)</sup>

書面田中藤作儀別ニ御構無之候条原籍ニ編入可為致事

この指令を受けた司法省は、明治六年九月十八日、石鉄県に対し、次のごとく指令した。<sup>24)</sup>

田中藤作已ニ絞罪処刑後蘇生ス復タ論ス可キナシ直ニ本籍ニ編入ス可シ

かくして、田中は、死の淵よりよみがえり、生き返った死刑囚という数奇な人生をおくることとなったのである。<sup>25)</sup> ちなみに、絞刑執行後に田中が蘇生したため、この執行に関与した石鉄県の聴訟課の属員は、前述の石鉄県伺によれば進退伺を提出し、石鉄県はこれが処置についても司法省の指示を仰いでいるが、これについても、司法省は、九月十八日、次のごとく指令した。<sup>26)</sup>

処刑済其屍骸ヲ親屬ニ下付シ四里半ノ道程ヲ昇帰シ 到着後初テ温氣アルヲ覺ヘ尋テ蘇生ス檢使ニ於テ罪

ノ科ス可キナシ

無罪

小崎 一 義<sup>27)</sup>

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

橋村正名<sup>(38)</sup>

野田直幹<sup>(39)</sup>

武司重緯<sup>(40)</sup>

秋洲 矯<sup>(41)</sup>

(1)「久万山頑民騷擾」国立公文書館蔵「愛媛県史料」四十一・国史第一稿・松山藩紀。なお、この騷擾を実際に見聞したと覺しき人物が記述したと思われる閑山人述「辛未久万山動搖略記」前掲「明治初期農民運動史料」第一輯・四六―四七頁には、浮穴郡下久万山周辺の農民が蜂起するに至った原因について

久万山住民ノ動搖シタルハ茲ニ數個ノ原因ヲ含有セリ、明治三年官命ヲ以テ神仏混淆セシ処ヲ分割スルト同時ニ係リ、官天明年度以後ノ創立ニ係ル社祠ハ渾テ之レヲ取除キ、最寄ノ旧社ヘ合祠スルコトナリ為ニ社殿ヲ毀チ、又中ニ就キテ所謂ナキ淫祠ノ神体ハ破却投火シ社殿ヲ併セ燒棄シタリ、故ニ信者ハ怨ヲ忍ビアリタルト、又久万山ハ僻陋ニシテ昔時人口繁殖セズ季候ノ寒冷ナルニ加ヘテ禽獸ノ妨害アル等ハ重ナル原因トナリ、居民散シテ永住スルモノ少ナケレバ……屢々旧御領主ヨリ保護恩典ニ浴シタル事ノ世々々孫々之レヲ伝テ各自腦裏ニ浸染シ、當時ノ旧御領主各藩一様土地人民ヲ奉還セラレ、藩知事ノ御資格ニテ松山ニ在ラレタル從五位久松定昭公茲ニ又各藩一体ニ知事ノ職ヲ免ゼラレ、既往二百有余年ノ封土ヲ去ラレ遙カ東京ヘ御還帰ノ朝命下リ、諸藩一体ノ事ハ明ラメ乍ラ今ヤ離別ノ心情ハ日夜切迫シ言語ニ言尽サレザル処アルト……且藩ノ官名ハ昔ノ職名ト變リ、改正ニ又改正ヲ加ヘ……何ガ何ヤラサツバリ分カラン其名ト共ニ其人迄ヲ忌ミテ、旧知事及ヒ旧職ノ人ヲ慕フニ至ル愚者ノ茲ニ臨ンデハ、性神ノ発スル処、順境ニ処スル時ハ忠良トナリ逆境ニ処スル時ハ暴挙トナルハ自然ノ徴ナリ……之ヲ要スルニ久万山郷ヨリ發セザルモ、旧松山藩各郡ノ内何レカ一度ハ暴発セザルヲ得ザル時期ニ当レリ

とみえ、また、同書・四八頁には、その経過について

八月十三日……東川村……柳井川村人氣常ナラズ動モスレバ拳村強訴セントスルノ兆候アリ……十四日……下坂村々ハ柳井川村ヲ先途トシテ順次沿道ノ各村ヲ誘ヒ糞笠鉄砲竹槍攜帶凡二日分ノ糧食ヲ腰ニ付シ松明ヲ照ラシ号ツテ曰ク、此出訴

二応セサルモノハ速時其ノ家屋ニ放火スト、躊躇セシモノモ狼狽シテ此ノ行ニ從フ、北坂ハ東川ヲ先途トシテ仕出村七島<sup>シマ</sup>村之レニ從ヒ出行、総人員久万町ニ会シ同地ノ寺院法然寺ニ屯在シ……未ダ出会セザル処ノ村々ハハ急使ヲ發シテ督促ヲナス模様アリ……其大勢人氣立チ結局松山藩庁迄出訴セザレバ止マル者ノ如シ、且租税課詰ノ官吏及郡役人等モ出訴人ノ内ヨリ村々重立総代ヲ呼寄セ説諭ヲナサントセシモ渾テ之レニ応ゼズ、茲ニ始メテ強訴一撥ノ称呼ヲ付スルニ至レリ。とみえる。これによれば、騷擾の發生は明治四年八月十四日ということになる。

ちなみに、下中邦彦編『愛媛県の地名』日本歴史地名大系・第三九卷（平凡社・昭和五十五年）四二二頁には、この「辛未久万山動揺略記」について、「杣野村（現面河村）旧庄屋小倉門十郎の明治三年の回想録」とみえる。なお、この「辛未久万山動揺略記」は、前掲「久万町誌資料集」四六六―四七四頁にも収録されている。

(2) 前掲「久万山頑民騷擾」。

(3) 前掲「愛媛県史」資料編・幕末維新・一七六―一七七頁。なお、前掲「辛未久万山動揺略記」五一頁には「八月十六日……久松家ヨリハ家従公莊八郎氏ヲシテ直書ヲ授ケ井手口屯集ノ処へ乗馬ニテ出張久松公直書ヲ繰返シ度々朗誦アリ」とみえる。これによれば、「旧知事手書ヲ齎ラシ」た月日は、八月十六日であり、「家令某」は、公莊八郎ということになろう。

(4) 前掲「久万山頑民騷擾」。

(5) 前掲「久万山頑民騷擾」。ちなみに、前掲「辛未久万山動揺略記」には、「八月十六日……強訴ノ多人數ハ久谷村井手口駅ノ街道ヲ填メテ屯集シタル処へ、暁天藩庁ヨリ三阪附近ニ發シタル騎馬偵察方群集中ヲ乗騎帰庁シタル為メ強訴人ノ内ニ負傷スルモノアリ、人氣殊ニ揺キ立チタル処へ折悪シク屯栗頭ノ人騎馬ニテ井手口駅ノ東端ニ現ハレタレハ、群集ノ大勢ハ又来タ今度ハ逃スナト口々ニ怒リ前ニ通過シタル騎馬ニ激シタル時トテ竹槍ハ秋ノ尾花ヲ見ルガ如ク前後左右ヲ取巻キ突出シタリ、乗馬ノ人ハ鞭ヲ以テ支ヘ倉卒馬ヲ早メテ断抜ントスル事故歩ノ内竹槍ノ為負傷シ馬ヨリ落チ之レヲ目掛ケ突クアリ打ツアリ終ニ溝中ニ倒レ入生死計リ難シト……聞ク処ニヨレハ此負傷者ハ當時久万山租税課出張詰少属重松約氏ニシテ或人ノ救済ニヨリ駕籠ニテ帰松スルコトヲ得タリ」とみえる（前掲「明治初期農民運動史料」第一輯・五一頁）が、これによれば、重松少属の負傷は、十六日のこととなる。

(6) 前掲「久万山頑民騷擾」。ちなみに、前掲「辛未久万山動揺略記」には、この「久万山頑民騷擾」の記述の内容に該当すると思われる「久松公（久松定昭——中山註）ニモ字タルミ（温泉郡桑原村樽味のことと思われる——中山註）迄近侍召連レ御出馬アラレシモ、到底此期ニ及ンデハ説諭モ其効驗アラザル者ト断念サレ流涕暫時ニシテ御帰邸アラレシト聞ク、而シテ久米日

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考（中山）

尾八幡ノ裏山手ニハ兵隊ノ隠現スルヲ見黄昏ノ頃ニ到レバ大野ニアル久米郡租税課出張所へ放火シ黒煙空ヲ巻キ続ヒテ火焰立登リ建物ハ固ヨリ器具記録ニ至ル迄焼燼シ、此時ヨリ久米下浮穴二郡内ノ強訴兼乱行人ハ追々数ヲ増シ時々合図ノ銃声響ナリ記述がみえる（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・五二―五三頁）が、八月十六日の出来事としている。

（7）前掲「久万山頑民騒擾」。ちなみに、前掲「辛未久万山動揺略記」には、この「久万山頑民騒擾」の記述の内容に該当すると思われる「十七日……四五声ノ大砲響クト間モナク各地ニ小銃發射ノ音アリ……鎮守宮ニ向フ一分隊ノ兵士ハ夷丸ヲ以交々發射シ土砂ヲ打上ケ樹葉ヲ打下ケ進ミ來ルヤ屯集ノ人民ハ過半四散シタリ……前夜各地ニ放火シタル暴民ト認メ爰々緩攻撃ヲ始メタルモノナリ……鎮守宮ニ至リ見レバ逃ゲ殘ルモノ二十人斗リ土地ニ喰ヒ付キタル如ク平臥シタリ、兵ハ悉ク之レヲ縛シテ各所ニ分置シ結リ鷹子村庄屋野間与三太宅へ連レラレ内門ヲ入り見レバ、強訴頭取山内才十郎氏副頭取トモ日フベキ中川内記等モ縛サレアリ」なる記述がみえる（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・五三頁）が、これによれば、騒擾の鎮定は、八月十七日のこととなる。なお、騒擾の主謀者として逮捕された浮穴郡日之浦村の山之内才十は、自己の逮捕日を八月十九日としている（明治四年八月・山之内才十口供書）前掲「諸県口書」明治五年・二十六・賊盜・第四百五十一号）。

（8）前掲「辛未久万山動揺略記」前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・五三―五四頁。

（9）前掲「辛未久万山動揺略記」前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・五四頁。

（10）「十三・久松定昭帰京届並頑民動揺ノ儀ニ付待罪伺」国立公文書館蔵『公文録』辛未九月東京府伺幕旗下。

（11）「久万山騒動につき、久松定昭、進退伺提出」前掲『愛媛県史』資料編・幕末維新・一七八頁。

（12）角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典・38・愛媛県』（角川書店・昭和五十六年）一三七頁。

（13）「明治五年二月九日・石鉄県（元松山県）御仕置伺書」前掲『諸県口書』。

（14）「明治四年十二月・元松山県浮穴郡久万山日之浦村百姓山之内才十久米郡北方村百姓田中藤作同郡刈屋村百姓相原喜助越智郡野々江村百姓越智源蔵同村組頭越智喜代助同村百姓藤原安右衛門風早郡庄村百姓西原藤次御仕置伺書」前掲『諸県口書』。

（15）前掲「角川日本地名大辞典・38・愛媛県」三八一、六〇二頁。

（16）「明治五年二月九日・石鉄県（元松山県）御仕置伺書」前掲『諸県口書』。この文書のうち、「壬申二月九日」附の「司法省御中」宛の「旧松山県」名儀の処刑伺書および「明治四年未年十二月」附の「旧松山県」名儀の山之内才十、田中藤作、相原喜助、越智源蔵、越智喜代助、藤原安右衛門および西原藤次の「御仕置伺書」については、愛媛県庁の所蔵にかかる「松山藩進達留」（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・五一―六頁）に、また、後者に附された、山之内、相原、田中の三名の口供書



については、同じく愛媛県庁所蔵の「石鉄県紀・首魁者口上書」（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・七一―一頁）にそれぞれ収録されている（ただし、口供書については、「山之内」を「山内」と記している）が、その内容には、若干の異同がみとめられる。しかし、その他の四名の口供書については、これまで紹介されたことのない資料である。なお、この「石鉄県紀・首魁者口上書」には、前掲「諸県口書」にはみえない「重松為次」の口供書が収録されている（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・一一―一二頁）が、これは、前述の山之内、田中および相原の三名の口供書とともに、国立公文書館蔵「愛媛県史料」四十四・国史第四稿・石鉄県紀（山之内、田中および相原の口供書）および「愛媛県史料」五十一・国史第一稿・刑罰（重松の口供書）にも収録されているが、字句に若干の異同がみとめられる。なお、前掲「石鉄県紀・首魁者口上書」ならびに前掲「愛媛県史料」四十四および前掲「愛媛県史料」五十一に収録されている山之内、田中および相原の口供書の末尾には、後述する明治五年十月十八日附の司法省の処刑指令と字句に若干の異同がみとめられるもののほぼ同様の文言（とくに量刑については、まったく同一である）がみられ、また、重松の口供書についても、その末尾に量刑文言が、前三者の場合と同様に附記されているが、これもそれに対応する司法省の処刑指令の存在が今のところ確認されていないので断言はできないが、おそらく前三者と同様に司法省の処刑指令にもとづいて附記されたものであらう。これらは、司法省の処刑指令が発令された後、石鉄県が、司法省に提出した処刑伺の控にそれをそのまま附記し、さらに、それが「愛媛県史料」に転記され今日に伝えられたものであらう。ちなみに、重松の口供書を、前掲「愛媛県史料」五十一・国史第一稿・刑罰により挙示すれば、次のごとくである。

伊予国久米郡苅屋村農

重松為次

一自分儀明治四年辛未八月十八日浮穴郡久万山日ノ浦村農山之内才十外三名廃藩ノ儀ニ付久万山村々ノ者挙テ出村致シ歎願ノ趣申立入米郡村内迄押寄来リ不同意ノ向ハ居宅焼払申触シ就テハ久米郡村々ノ者共平井河原へ集会致シ自分ハ松山城下へ某物売歩行同日午後三時頃焼宅致スヤ否平井河原出会致シ久米村ニテ酒ヲ飲ミ夫ヨリ隨行シテ平井谷村へ至リ候所多人数ノ中同村庄屋重松賢次郎宅ニ於テ乱妨致シ鄉村反別標面数通取出シ焼立居候ニ付自分モ醉狂ノ余リ携フ所ノ竹槍ノ切先へ右燃掛ケノ帳面ヲ懸ケ庄屋宅玄関ニテ振廻シ火焰熾ナルヨリ建具散乱ノ中へ投入候処多人数追々建具等ヲ持置子候ヨリ竟ニ同家焼亡致候事

明治五年五月廿七日旧松山県ニ於テ差籠入中大病ニ罹リ親戚へ賁付ノ上宿下ケ相成追日快方ニ御座候所右差籠中同様罷

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考（中山）

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騷擾裁判小考（中山）

在候大洲産無宿春次参一夜自宅ニ泊リ雑話中拾二枚外ニ品盜品ト打明シ売捌方相頼マレ苅屋村途上名前不存モノヘ代金壹円七拾錢ニ売り払内金壹円五拾錢配分ヲ受候事

一前件悪業ノ始末熟考致候得ハ一命モ危フシト存付恐怖ノ余リ同年九月三日夜親戚快疫ノ隙ヲ窺ヒ直チニ逃亡致候事  
右之通相違不申上候以上

明治七年六月廿四日 同人

これによれば、重松は、この騷擾直後の逮捕、取調では、病氣を理由とする資付処分により、親戚委託による勾留の執行停止がなされたこともあつてか、騷擾関係の犯罪事実は立件されなかつたものと思われる。さればこそ、明治五年二月九日附の石鉄県の特刑伺の中に重松の名前はみられなかつたのであろう。

(17) 明治天皇の御名「睦仁」を敬避するため「仁」の最後の画を欠き「亠」としたものであろうか、とすれば、いわゆる闕画ということになる。ちなみに、明治元年十月九日・太政官第八百二十一号布告には、

恵 紘 睦

右三字 御諱ニ付名字等ニ相用申間敷儀ハ勿論刻本等 二ハ闕画可致候事

とある（内閣官報局編『法令全書』第一巻（原書房・昭和四十九年復刻）三三八頁）が、「恵」は、仁孝天皇の御名「恵仁」を、「紘」は、老明天皇の御名「統仁」をそれぞれ敬避したものである。前掲太政官布告によれば、「仁」については、とくに敬避してはいないが、それらに準じたものであろうか。なお、この闕画の制度は、明治五年一月二十七日・太政官第二十四号布告により廃止されている（内閣官報局編『法令全書』第五卷(1)（原書房・昭和四十九年復刻）四九頁）。また、闕画については、石井研堂「闕画の施行と廃止」『明治事物起原』Ⅰ・ちくま学芸文庫（筑摩書房・平成九年）一二二―一二三頁を参省。

(18) 孝明天皇の御名「統仁」を敬避するため「統」の最後の画を欠き「紘」としたものであろうか、とすれば、いわゆる闕画ということになる。

(19) 新津綱領の引用は、官版により、傍註は省略した。

(20) 内閣記録局編『法規分類大全』54・刑法律門(1)（原書房・昭和五十五年復刻）一一九―一二〇頁。

(21) 石鉄県伺を差し戻す旨の司法省の回答に関する直接的資料を欠くので、その理由などについては不明であるが、前掲「松山藩進達留」に収録されている明治四年十二月附の元松山県の御仕置伺書の末尾に

二月十五日

御不審之ケ条有之御差戻相違

と朱書されている（前掲『明治初期農民運動史料』第一輯・六一七頁）ことや後述する明治五年五月十五日附で司法省に提出された石鉄県の「旧松山県所置擬断何御不審之廉御訊問ニ付再調御届書」が存在することなどにより、その事實は疑う余地のないものであらう。また、差戻の理由についても後者の資料からある程度は推測することができる。

(22)「明治五年五月十五日附・石鉄県伺書」前掲「諸県口書」。

(23)「明治五年十月十八日附・司法省指令」前掲「諸県口書」。この指令には、日附がないが、欄外に「申十月十八日付ス」と記されているので、それが発令日であらう。なお、この指令には、**縣**、**青木**、**松本**の各捺印がみられるが、これは、指令の起草に関与した司法省官員の「氏」であらう。すなわち、「縣」は、少判事縣 信綱、「青木」は、中判事青木信寅、「松本」は、権大判事松本暢のことであらう。（明治五年二月、袖珍官員録「一二七葉・表、裏、一二八葉・表、」明治六年一月・袖珍官員録「一八五葉・表、裏。」）

(24) 新律条例を学界に最初に紹介された藤田弘道氏によれば、新律条例には、第一次草案（明治五年八月奏進）、再校草案（明治五年十月十三日進呈）、改正淨書案（明治五年十一月二十八日再進呈）、最終案（明治六年三月九日以降）の四種があつたとされ（藤田弘道「公文録」所載「新律条例」考）手塚豊編著『近代日本史の新研究』I・北樹出版・昭和五十六年・一六八頁）、第一次草案は、藤田弘道「足柄裁判所旧蔵『新律条例』考（二・完）——改定律例の草案と覚しき文書について——」『法学研究』第四十六卷三号（慶應義塾大学法学研究会・昭和四十八年）七四—九九頁に、また、再校草案は、前掲・藤田「公文録」所載「新律条例」考「一二七—一二八頁にそれぞれ復刻されている（前掲・藤田「公文録」所載「新律条例」考「一二六、一二七〇頁）が、司法省が、本件の量刑に利用したのは、時期的にみて、前述の第一次草案か再校草案のいずれかであることはまちがいないところであるが、そのいずれであるかは、条文番号は異なるものの、その内容は、まったく同一であるので、にわかに断定しがたいが、ここに司法省が量刑の基準としたものは、後述の越智（源）以下三名の量刑にみえるごとく、「二死三流一減法」（新律綱領・名例律下・加減罪例条）を適用し、流三等（流刑は、一等、二等、三等の三段階に分かれ、三等が一番重刑とされていた——新律綱領・名例律上・五刑条——が、實際は、前述のごとく、準流法によつて流刑は実施されていなかった）から一等を減じ徒三年としているところからみて、三流一減を三減に改める規定の存在しない第一次草案であつたと思われる。なお、このような私の解釈に対し、類似の事例（本件の司法省指令の発令日が、明治五年十月十八日であるのに対し、類似事例の司法省指令の発令日は、明治五年十月二十四日である）についてはあるが、かつて藤田弘道氏より疑問

に思われる旨の懇切なる御教示をいただいたことがあるが、いまだ、それについての成案も得ていないので、いまはしばらく旧説と同様の考へ方に従うこととする。なお、この点については、拙稿「明治四年・岡山県下磐梨郡農民騒擾裁判小考」「手塚豊編著『近代日本史の新研究』Ⅸ（北樹出版・平成三年）九六頁・註（52）を参看されたい。そこで、本稿では、前掲・藤田「足柄裁判所旧蔵『新律条例』考（二・完）七四―九九頁に収録されている新律条例（第一次草案）を利用していただく」ととする。

(25) 日本史籍協会編『司法省日誌』三・明治六年八・九月（東京大学出版会・昭和五十八年）五三二頁。

(26) 穂積重遠『有関法学』（日本評論社・昭和九年）一五三―一五六頁。

(27) 手塚豊「生き返った死刑囚とその処置」『法学セミナー』第三十号（日本評論新社・昭和三十三年）六八―六九頁。

(28) 佐藤清彦「奇談追跡」（大和書房・平成三年）八六―一〇三頁。

(29) 新律綱領・名例律上・五刑条には、「凡絞ハ。其首ヲ絞リ。其命ヲ畢ルニ止メ。猶ホ其体ヲ全クス、遺骸ハ。親族請フ者アレハ下付ス」と規定されているので、石鉄県もこれに従い、田中の遺骸を親族に引き渡したのであろう。ちなみに、新律条例（第一次草案）第十二条（名例律・五刑附例）にも、「凡臬新絞ノ遺骸ハ親族請フ者アレハ下ス」と規定されているので、この規定に従って処置した可能性も否定できないが、いずれとも断定しがたいので、ここでは前著によることとする。

(30) 前掲『司法省日誌』三・五二―五二三頁。

(31) (32) (33) 「自第七十二至七十三」絞罪人蘇生ニ付処置ノ事「明法寮編纂『第二惡法類編』第十九冊・第一篇・国法部・第十四卷・治罪（明治七年）五二葉・表―五三葉・表。なお、この往復文書は、前掲・手塚「生き返った死刑囚とその処置」六八頁にも引用されているが、典拠を明示されず、また、一部ではあるが省略されたところもあるので断言はできないが、ここに引用したものとの間に若干ではあるが字句の異同がみとめられるところなどからみて、あるいは他の資料によったものであろうか。

(34) 前掲『司法省日誌』三・五二三頁。

(35) 前掲・佐藤「奇談追跡」一〇〇―一〇三頁によれば、田中は、蘇生後、二十六年間生存し、明治三十一年一月六日、五十六歳で死去したようであり、その余生は、必ずしも幸福というわけではなかったようである。

(36) 前掲『司法省日誌』三・五三―五三四頁。

(37) 小崎一義は、香川県士族にして、これ以前の官歴は、明治三年十一月多度津藩権大属、四年五月十九日丸亀県権少属、五年

一月十日松山県十四等出仕、六月八日石鉄県権少属、同二十三日選卒徒罪取締兼務、九月十二日徒刑掛兼務差免、同二十二日選卒次長重掛兼聴訟掛兼務、十一月二十八日石鉄県少属などである（『明治四年石鉄県官員履歴』近代史文庫編『明治前期地方制度史料』第二輯——戸長制度・官員履歴——愛媛近代史料No.16・近代史文庫・昭和四十年（一〇三一—一〇四頁）。

(38) 橋村正名は、高知県士族にして、これ以前の官歴は、明治三年八月十九日高知藩権少属、四年九月十七日高知県権少属、五年三月十日石鉄県十四等出仕・聴訟掛、六月八日石鉄県権少属、九月八日徒刑掛兼務、十一月二十八日石鉄県少属などである（前掲『明治前期地方制度史料』第二輯・一〇三頁）。

(39) 野田直幹は、石鉄県士族にして、これ以前の官歴は、明治三年十一月二日松山藩少属、四年八月二十八日松山藩権大属、五年一月松山県十二等出仕、三月二日刑訟掛、六月八日石鉄県少属、十月七日懲役掛兼務、十一月二十八日石鉄県大属などである（前掲『明治前期地方制度史料』第二輯・一〇二頁）。

(40) 武司重緯は、石鉄県士族にして、これ以前の官歴は、明治二年十月一日小松藩権少参事、三年十一月小松藩少参事、五年三月十日石鉄県十一等出仕・庶務課掛、四月五日聴訟掛、六月八日石鉄県権大属などである（前掲『明治前期地方制度史料』第二輯・一〇一—一〇二頁）。

(41) 秋洲 矯は、石鉄県士族にして、これ以前の官歴は、明治三年十一月今治藩大属準席、四年八月今治県大属、五年三月十日石鉄県十一等出仕、六月八日石鉄県大属、六年二月二日東京出張所詰・庶務掛などである（前掲『明治前期地方制度史料』第二輯・一〇〇頁）。

### 三 むすび

以上が、明治四年八月中旬に松山県下の浮穴、久米の二郡を中心に発生した農民騒擾の概略およびその裁判の経過である。この騒擾については、本稿「はしがき」においてふれたごとく、愛媛県地方史関係の文献を中心に多数の先業が存在しているが、一部をのぞいて、いずれも簡単なものであり、とくに、その司法的処理の過程については、十

明治四年・松山県浮穴、久米二郡農民騒擾裁判小考（中山）

分に解明されたとはいいたいものがある。そこで、本稿では、前掲『諸県口書』明治五年・二十六・賊盜・第四百五十一号に収録されているこの騒擾に関する新資料などを利用し、その裁判の経過の概略などを明らかにした。資料蒐集も不十分のまま、その貧弱な資料を基礎に、余りにも推測をかさねすぎたことをみずから認めざるをえないが、本稿が契機となつて、愛媛県地方において新資料が発掘され、この騒擾の内容が一層鮮明になることがあるとすれば望外の倖せである。

（平成十年十一月三十日稿了）

（キーワード） 農民騒擾、新律綱領、新律条例

〔附記〕本稿を草するにあたり、法務省法務図書館、国立公文書館、愛媛県立図書館、伊予史談会等には、貴重な資料の閲覧につき種々御厚配にあずかった。ここに併せて、その学恩に対し、深甚なる感謝の意を表したい。